

ける。遠藤但馬守・西尾豊後守忠政は東軍一味たるに依つて、八月廿日、稻葉右京が郡上の城を攻むる處に、金森法印・同息出雲守、關東より馳せ來つて、又此陣に加はりける。稻葉は、犬山の城二の丸を固め居たりしが、之を聞き、即時に來り後詰して、はや合戦を始め、関の聲・鐵炮の音、雷の激するが如くに聞えける最中に、稻葉も兼ねてより東軍に内通あるに依つて、早速和睦して、互に陣をぞ引きたりける。關長門守・加藤左衛門、此等も共に通じて、關東へ降参したりける。然る處に、不慮の事こそ出來にけれ。此郡上と申すは、稻葉右京進城主たりと雖も、遠藤左馬助數代の本領にして、近頃迄居城なりければ、案内は能く知りたり。城替の恨もありて、思ふ様は、稻葉は、犬山にありければ、定めて、城にははかしくしき留守居もあるまじければ、密かに飛驒國より押寄せて、手痛く攻むる程ならば、いかに勇功の稻葉なりといふとも、無勢といひ、大將なき事なれば、途方にくれて降参し、城を渡すは必定なり。此術は、敵の猛氣を、奪ふ所の計策なりというて、遠藤と金森と牒し合せ、遠藤は、濃州外田口より、金森は、飛驒より長瀧口へ押出され、道筋の在々へ相觸れて、夜は松明箒を焚き、嶮岨なる細道を通り、やう／＼國境にぞ、馳出でたりける。斯かる

處に、堀尾・福島も、日頃稻葉と懇志なる故、種々に異見を加へ、稻葉味方に參る上は、郡上の城を攻めらるゝ事、さら／＼無用の由、井伊・本多の方よりも、遠藤・金森へ、急ぎ飛脚を以て、いひ遣すと雖も、金森聞いて、路次の嶮岨を経て、國境迄馳出でながら、空しく引取るといふも、思へば餘り無念なり。後難は兎も角もあれ。是非に乘取り候はんかと、遠藤へ申遣しければ、聞くや否や、はや用意して打立ちける。金森は、家人に吉田孫三郎とて、もと郡上の者なれば、則ち之を案内にて、尾崎山より郡上の古田山へ打登り、城を目の下に見下して、九月朔日の早天に、長瀧口より攻懸る。城中には、稻葉が末子修理亮稻葉土佐入道計り留守せしが、思はずも、関の聲に駭き、周章て騒ぎ、誰よ彼よと呼ばはれ共、物に馴れたる宗徒の者共は、皆犬山へ供したりければ、唯途方にくれ茫然として居たりけるが、修理亮申しけるは、屈強の切所を持ちながら、一支も防がずして、敵を城へ入れん事、世上の嘲といひ、生涯の恨、何か是に過ぎ候はんとありければ、よくも申したり。我も年は寄りたれども、實盛にも劣るまじと、孫が心を諫めらるれば、修理も、楠正行が思をなし、今日を限の命ぞと、緋緘の鎧に、五枚甲の緒をしめて、躍り上つて上帶し、遣ひ馴れたる十文字の鍵を

提げて、城の門を押開き、突いて出づれば、天晴の若者かなといふ儘に、柴崎甚左衛門・郡波土左衛門・中村太郎左衛門只三人、城山の谷間たにあひの切所を頼みて防ぎける。扱此口は、屏風を立てたる如くなる巖石の嶮岨の一筋を、通る路なれば、寄手の軍兵、攻め上らんと勇めども、二人と並ぶ事叶はざれば、魁首二三人の外は、皆々見物してぞ居ける。然るに、城兵中村が鍵先、唯古の栗生・篠塚よりも、手痛く突出脱〔カ〕せば、寄手も、辟易して見えける處に、郡波も續いて聲を懸けよるにぞ、眞先なる敵兵、あまされて倒に落ちにけり。後に續き上りし者共、將基倒しに落ち重り、歴々の飛驒武者共、味方の鍵・長刀に貫かれ、手負・死人にて、流石の谷も埋れんとぞ見えにける。中村も、此勢に破りて入り、一騎當千と戦へば、終に討死をぞしたりける。寄手も、是に肝を消し、是は楠正成が再來して、千早を持つが如きかと、續いて乗入る人もあらざれば、柴崎郡波諸共に、城中へぞ引取りける。此時、寄手の軍兵共、城には、人もなきかとして、古城に寄りけるが、本城の後に大きな堀ありて、柵の構へ厳しければ、たやすく攻め入るべきやうぞなく、竝居ける處を、城中より見すまし、弓・鐵炮を打懸ければ、窻雀の如く、釣瓶打に打ちけるが、仇矢は更になかりけり。金森が家人牛丸次郎右

衛門・今井平助・阿砂賀作十郎も打殺され、手負・死人は數知らず。平砂忽ち變じて紅口が如し。金森は覺えず尼崎山へ引取りけり。爰に飯沼源左衛門、城乗を心懸け、前よりも堀を越し、堀の下に著くと雖も、同じく續く者もなく、味方、既に引取りければ、引かんと思ひ、暫く猶豫する處に、城中の體・旗・指物を、堀際に結び付けて置きたる計りにて、人音もせざりければ、堀を越えて、直に登つて、旗一本指物共にぬき取つて、味方の陣に歸りしを、城より之を見て、打てや者共と、弓・鐵炮を打懸け、れども、恙なく引取りしは、誠に剛の者とぞ聞えける。遠藤左馬助は、和良口より追手へ押寄せけれども、搦手の勝負を聞いて、卒爾に城へ、手著せずして、櫻町といふ所に、暫く陣取つて、兩將より扱を入れければ、修理も、土佐守に先づ急いで、右京進に告知らせ、援兵を得て、戦はんと相談して、兩將へ返答しけるは、扱の儀、如何にも仰に隨ひ、是れより委細申入るべしと、いひ遣しけるは、謀深くぞ覺えける。扱犬山へ、此趣を知らせたく思へども、敵の圍、嚴しくして、使を外へ出すべき様なければ、案じ煩ひ居ける處に、小室傳三郎といふ者進み出で、某、不肖には候へども、何とぞ才覺致し、随分參り見申さん。若し此事仕損じ死せん命も、戰場にて討死仕るも、忠義に二つはあるまじけ

れば、御暇申す旁々として、何とか謀りけん。大敵の圍を事なく忍び出でければ、先づ大息つぎ、嬉しやと獨言して、犬山へ一馳駈付け、右京に、由を斯くと告げければ、右京、元來短慮なる勇氣壯んなる男なれば、篤と巨細をも聞届けず、我が領内へ踏込まれても何の甲斐あらん。彼の奴原、一人も生かしては歸すまじ者を。續けや〜と、馬引寄せ打乗りて、一騎駈に駈け行きけるが、城もとより二里計り此方なる借安村に馳著きて、續く勢を待揃へ、九月三日の曉天に、郡上の城へ乗込まんと、齒がみをしてぞ待ち明かしける。遠藤左馬助、之をば努々知らずして、無異の扱をや調へて、和睦あらんと、油断してありける處に、右京が軍勢、鬨をどつと揚げ、太鼓の聲、鉦を鳴らし、貝を吹き、鶴の翼を廣げたる如くなつて、攻包むに驚き、遠藤、思ひ寄らざる事なれば、何の用意もなく、馬に乗れども、繋いであれば、打てども出でず。弓を手に取れども、鎧を著る間もあらざれば、中帶計りにて走り出で、鐵炮を持つても、火繩なければ、杵を持ちたるが如くにて、算を亂して、踏合口あひて、我も人も破れ具足に取付き、えいや〜と懸合ひて、途方を失ひ、騒動して、無事なる時に見ば、笑はぬはなかるべし。されども、其中より緋緘の鎧に、鍬形打つたる甲を著、二尺八寸の太刀を、

眞向に差かざし、粥川小次郎と名乗つて、右京が先陣を目懸け、眞一文字に駈向ひし有様は、天晴勇士とぞ見えにける。雷光稻妻の如くに飛廻り、人馬の選びなく、ばらり〜と薙倒し、死狂ひに狂ひける處に、稻葉忠次郎が兵卒に、日比野吉左衛門と名乗懸け、十文字を以て突き懸れば、小次郎、心得たりと打合ひけり。日比野、引退き以て開いて、鎧の綿嚙をかすかし寄つて、もぎ放せば稻葉忠次郎、走り寄つて首を取りける。夫より敵・味方入亂れ、火花を散らして戦ひける。遠藤方の朽川五郎・鷺見忠左衛門・近藤作助等、思の儘に働いて、敵・味方の目を驚かし、三人一度に、討死をしたりける。暫時の間に、手負・死人は山の如くになりけり。依つて遠藤金森、櫻町の陣を取れば、稻葉は、其儘城にぞ乗込みける。斯くて、兩方ならみ合ひし處に、彌・坂の沙汰になつて、人質を出せば、遠藤・金森も和睦して、郡上を引拂ひけり。稻葉は、元來會津出勢の人数なりしかども、秀信の幕下に居るは、心に任せざる事なりと、諸人に其理をいはんも成難く、世の人にも、面目なく思ひて、剃髮染衣の姿となりて、赤坂に來りしを、福島、種々に取繕ひしかば、兎角の異議に及ばず、御赦免ありければ、同九月十四日に、出仕を勤めけり。斯くて、稻葉は、次男修理を以て申上げけるは、御出

馬の筋、待受け奉らん爲めに、大豆戸まめどの渡には、柏原平助大軍にて出張致させ候。小牧表には、島左近二萬餘人にて控へ候間、清洲へ御懸り給ひて、御進發に於ては宜しく候はんか。さあらんには、御迎に馳出で申さんと、委細に註進し奉らんにぞ、其儀に應じ給ひしとなん聞えし。福島左衛門大夫正則は、濃州西方を打廻り、敵方の要害方術を見分せんと、僅か二百餘にて、清洲より打出で、風水の氣象を窺ひ、天下の盛衰をぞ考へける。市橋下總守在所、西美濃今尾の城に馳行きて、美濃路へ出張したる西軍の強弱を聞き合せ、先づ高木が居城、高須の城をば、計策を廻らし乗取るべし。小事とはいひながら、一戦して敵の氣を奪はん謀なればとて、徳永法印に、斯様々と低語しければ、徳永則ち領承して、家臣布家市左衛門、竝に寶壽院とて、加納村の一向坊主を、密かに高木が方へ遣し申しけるは、甲を脱ぎ降參し、城を明け渡され候へと、委細懇にいひ送りけるを、高木聞いて、思案しけるが、小身故、當城抱へ難くして、聞き逃したるかといはれんも口惜し。其上、原隠岐守、太田の中島郷に在陣せり。彼に固く申合せし事なれば、容易く御請を、致すべき様なしと返事して、兩使をぞかへしける。徳永は、仔細を聞いて、寢食を忘れ、色々思案を廻らし、早々に其陣引取れと、

頻竝の使を立てたりける。是に依つて、高須の城の圍を解きて、寄手の軍兵は、早速引去りければ、高木は、味方の兵卒を呼集め、面々如何に思ふぞや。此城郭に、大敵を引請けて、後詰の頼もなき處に、討死せんも本意ならず。幸に寄手も引きたる事なれば、一と先づ、當城を明け退き、後日の合戦に、恥辱をば雪がんといひけるにぞ、諸士一同に、御尤と應ずれば、頓て、福岡繩手に差懸り、駒の渡し船に棹さして、山の手の方へぞ退きにける。高木は、何とか思ひけん、其近邊の川船共を、悉く截流してぞ、捨てたりける。

直江山城守兼續最上へ攻め入る事

井幡屋城を攻むる事

さる程に、景勝方の評定には、江戸御父子、上方御退治の間に、最上を攻め平げ、東根の城を取るべしとて、直江山城守兼續、四萬餘の軍兵を率し、九月九日に、會津をば打立ちける。先陣は、春日右衛門尉四千餘、之に浪人五千餘加はりて、眞先を押へたりけるに、二陣五百川縫殿助四千五百餘、浪人三千餘之に加はる。三陣は、上和泉主水、其勢三千五百餘、四番は

大將直江山城守旗本一萬、五番は色部長門・松本木工助・高梨兵部丞・松本内匠助、彼此其勢八千五百餘、杉原常陸介親憲を以て、軍奉行となし、會津をば打立ちける。軍法の正しき事、尤も嚴密なり。上杉家輝虎以來の軍法にて、旗はなし。皆一組ひととせなへしるし一隊の識に、二本・三本宛、思ひ思ひに差させけり。何れも腰革にて前ざしなり。鐵炮は、大方種子島、凡そ此度二千挺とぞ聞えたる。諸手の軍兵共、思ひくの出立、申すも中々愚なり。西方院といふ法師武者、數十度の場數なりければ、景勝より皆朱の武具赦免にて、具足・甲・上帶・肌衣にて皆一色に赤かりける。朱鞘の太刀・刀・朱柄の鍵二三口尺ありけり。赤しなへに、金のざらくを置いて差したりける。鹿毛の馬に、猩々緋の馬面懸け、朱鞍懸けて乗りたりける。五百川縫殿助は、二の手の大將なるが、銀の具足甲に、鷲の簀毛の纒に、銀の中くりを出して差しければ、毛は千にぞ見えたりける。前田慶次郎利太は、黒具足に、猿の皮の投頭巾をかぶり、猩々緋の廣袖羽織に、背に金の切れけにて、曳兩筋を縫ひ、金のいらたか珠數を襟に掛け、珠數のつめには、金の瓢箪を付け、後へ下りける。瓦毛の七寸計りなるを、野髮にして、銀の頭巾をかぶらせ、朝鮮鞆掛けてぞ乗りたり〔脱カ〕乗替は、黒の馬二寸五分計りなるが、殊に太く逞しきに、

梨子地の鞍置かせ、緞子の囊に、糧米に味噌を入れて、三頭にかけ、種子島二挺鞍壺につけて牽かせたり。其外、色々様々の物の具出立馬・鞍、誠によき見物にてありければ、僧俗・老若男女、町中は申すに及ばず、城中より宿陣迄、大方續きける。十日には、米澤の城に著く。直江山居城なれば、諸軍へ酒肴を送り、物主組頭へは、城中にて饗應を出しけり。十二日は、拂曉に米澤を打立ち、最上へぞ攻め入りける。最上出羽守義光は、直江、大軍にて寄せ來る由、聞えければ、上の山より幡屋の城迄、若共五箇所を構へ、上杉勢の押し來る路を支へんとす。上杉勢の定には、上の山口より、山形の城へ攻め入るべし。此道、人馬の足立よく、平場なりとありけるが、最上義光が兵、江口五兵衛が籠りたる幡屋の城中の侍に、會津の先手の大將春日右衛門尉と、年來申通じ、懇切なる者あり。此者、密かに使を、春日が方へ遣し申しけるは、此度貴殿御先手として來り給ふ事、幸の事なり。幡屋の城へ取懸け給へ。我等後切して、城を取つて進らすべし。此通を山城守殿へ申達し、本領安堵を給はり候へとぞ申越しける。則ち人質を添へ、血判の誓詞を越しければ、右衛門尉悦んで、其狀を本陣へ持參し、直江に見せければ、兼續、大に悦び、其使者に金銀等引出物し、本領安堵相違あるべからざる旨

を、返答したりける。是より直江、俄に道を替へ、上の山をば餘所に見て、山路へ懸り、幡屋の城へぞ赴きける。此道は上の山筋に違ひ、山中大切所にして、人馬の押道難儀なり。其上、幡屋の城谷の城・寒河江城・長谷堂の城四箇所あり。其四箇所を根城にして、小城廿一館を構へたり。又上の山へかゝれば、山形の城へ押路もよし。早速の大功樹つべかりけるを、幡屋の城兵よりの内通を心に入れ、山道へ大軍を押入れける。軍奉行杉原常陸介親憲大に怒り、直江に向つて申しけるは、敵方より内通御座候て、味方、吉左右を得られ候由承り候。是は如何なる仔細にて候やらんと尋ねければ、兼續聞いて、其通幡屋の城中に、内通の者これあり。是に依り、押道をかへ、山路へ懸り、幡屋の城へ取詰め候といふ。杉原聞いて、山城守を諫めけるは、左様に候はゞ、春日右衛門尉一備九千餘を、幡屋の城へ差向けられ、總軍は直に山形の城へ押詰め、其根元を攻め落す時は、其末々の小城共は、皆攻めずして落ち申すべく候。凡そ幡屋筋と上の山筋兩道を考へ候に、迂路・直路三日路の違ひなり。我等考へ候に、敵軍、謀を構へ候て、此方へ一旦利を與へ、我が人數を、險阻の切所へ引入れ押路に滯らせ、其間に、山形本城要害を構へ、防戦の行をなすと見え候間、唯願はくは、諸軍勢を直路の上の

山へ押入れ、山形の城へ、一時も早く取懸かられ、扱東根の城迄乗取る御行、專一に存じ候とありければ、直江、元より、杉原常陸介と中惡しければ、此異見を、曾て用ひずして申しけるは、貴殿は軍奉行にて、其職重き人にて候へば、其申さるゝ處、一々理に當り候。然れども、我等の申す處も、道理のなきにしもあらず。幡屋の城に、内通ありて、乗取らせ候はんと、申越し候故、我等も、先づ事の成り易きを求むる事、愚人の常に候故、先づ是へと志して、諸軍を押しむけ候なりと申しけり。常陸介、其意味を用ふべからざる體をなし、重ねて申すに及ばずして、己が陣小屋へ歸し、大息つきて、獨言に申しけるは、直江山城守は、寵愛の小性達より起つて、大身に經上り、旄を取つて、度々の勝軍にならひ、威勢、年を追うて彌増、主君を輕んじ、上杉家を己一人にて、仕たき儘にし、おごり壯んにして、秀吉公の御前へ日々に召出さる。之に依つて御所をも見侮り、上杉家の仕置、萬事に依怙これあり、左道なり。さりながら、直江飽く迄才智これあり、謀略人に勝れたる處ある故に、又能く人の情を得、諸人を懐け隨へたり。此度治部と一味し、天下の大亂を引出す事、直江が所爲にあらずといふ事なし。國家の禍を引出し、天下の騒動を致す事、彼にあらずして、又誰とかせん。

上杉の御家も、末になり候と、涙ぐみて悔みければ、之を聞く人々、皆尤とぞ申しける。既に直江は、四萬餘の勢にて、幡屋の城へ押寄せければ、城主江口五兵衛尉光堯之を聞き、人數を出し、道寄にして一戦せんといふ。江口小吉・同忠作・飯田播磨守諫めけるは、世の諺に、外の百人を以て、内の一人を窺ひ難しと申傳へ候。上杉家四萬に、〔脱ア〕人數千計りにも及ぶぞ。是手を以て、大河を堰ぎ止めんと致すに似たり。唯城を出でずして、要害に引籠り、弓鐵炮にて打立てんと申しける。江口五兵衛が曰く、左様にてなし。人數を以て争ふ時は、小軍は多勢に叶ふべからず。謀を以て戦ふ時は、兵の多少に依らず。唯我に任せよとて、伏兵を六所に伏せ置き、五兵衛は、城中に旗指物を立てつゝ待懸けたり。さる程に、九月十三日の曙に、直江四萬餘にて押寄する。江口五兵衛は、馬強なる兵七八十騎引連れ、誘引出まきひさんが爲め、城外へ押出す。皆馬上に弓を持ちたりける。總構を出でて、押廻す所にて、直江が大軍押出すに、はたと行逢ひたり。江口が兵共、差詰め引詰め矢種を惜まず散々に射る。直江が先駆、高濱彈正後肥州・劔持市兵衛後保科肥後守・駒木根小八郎後右近御旗本御等、種子島にて打立しかば、江口が騎馬弓の者共二十騎計り、將棊倒に打落され、殘兵共怵へ兼ね、引色に見え

けるに、右の犀ヶ崎より、前田慶次郎・宇佐美藤三郎・平居出雲守十騎計り馬を踏放し、鎧追取り懸りけるを見て、江口が勢押立てられ、城の大手迄、六町計り引取りける。上杉勢、遁すなとて、引付けて追駈けゝるに、海松色の纒かけたる武者と、猩々緋の羽織武者二騎、步者四五人、町中にて返し答へけるを、直江が侍森山舍人後水野淡路守に奉公す一番に懸り鎧組し、纒著はらぎの武者を突き伏せ、高名しけるに、殘る敵は城内へ引入りけり。上杉勢、雲霞の如く押込みける所に、矢倉の上塀裏より、大筒にて打立て、貝を吹きけると等しく、六所に伏せ置きける伏兵共、起出でて立狭み、散々に射る。上杉家は、謙信よりの軍法にて、奇の中の奇正・正中の奇正、一手別手といふ事ありて、斯様の不意に遇うても、周章つる事なく、敵に當つて迷はず。此故に、六所の伏兵の敵へ取合せ、此方より却つて斬りかゝりしかば、伏兵共、一刀も合せず、城中指して引入りける。上杉勢、追ひすがひ鐵炮にて打立てければ、五町計り中にて、三十人餘打留めける。伏兵大いに敗軍し、溪澗に落ちて死する者、數を知らず。上杉先手、春日右衛門尉九千餘、伏兵の逃ぐるに從ひて、大手口迄、攻め付けゝるに、江口五兵衛、五十騎計りにて、大手の門前に控へて、伏兵共の逃げ來るを見て、いひ甲斐なき者共かな。上杉の軍兵

直江山城守兼續最上へ攻め入る事并幡屋城を攻むる事

共、手二つ、味方も手二つ、勝負に何と負くべきや。皆返し合せ、討死せよと匂りければ、伏兵の物主加藤源左衛門・岩瀬和泉守・草刈善助・林縫殿助・真島左衛門・日野八郎取つて返し、上杉の軍勢の中へ駆入りける。兩方より打ちたつる矢・鐵炮は、雨の降るが如し。甲の鏝をゆりあはせ、えいや聲を出して斬り結び、或は切つて落すもあり。或は組んで落つるもあり。南北へ追ひなびけ、東西へ追ひまくり、火花を散らし、七八度迄戦ひける。上杉方の大將春日右衛門尉・金銀の短尺纜懸け、馬に白泡はませ、杖に縋り下知しけるは、味方は皆小旗をさしたり。城方は、伏兵にて小旗なし。夫を目印に組んで討てと、下知しければ、心得候とて、押並べ〜引組んで落重り、透間ありとも見えざりけるに、多勢防ぎ難く、城方伏兵の物主加藤源左衛門・岩瀬和泉守・草刈善助・林縫殿助・真島左衛門・日野八郎六人、一足も退かず、討死したりける。上杉方、勝に乗りて攻め近づき、江口五兵衛も相叶はず、三の丸を捨て二の木戸にて防ぎける所に、兼ねて内通の者、本丸に火を懸け、関の聲を揚げたりければ、城中周章て騒ぎて、男女東西に逃げ迷ひ、防ぎ戦ふ者なかりける。江口五兵衛は、ひた甲六百餘、二の丸を抱へ防ぎ戦ふ。上杉方先手色部長門守・春日右衛門尉、塵を振つて、城中に裏

切ありて、火を懸けたり。爰を揉合せと、其身、眞先に進みける處に、宇佐美民部少輔勝行、銀の手の口の黒纜にて、二の丸門脇へつき、一番に乘入りしかば、夏目軍八・宇佐美藤三郎は、柵を越えて乗込みける。續いて井上三郎兵衛・下條平太夫・白土内匠（佐藤繼信が後胤）、其外百人餘乘入りける。城主江口五兵衛も、手廻二三十人にて、眞丸になり引きけるを、色部長門守、塵を振つて下知しければ、上杉の軍兵共聲を懸け、穢し返せ、五兵衛殿、本丸には火懸り、何方へ行くべきぞ。とても此世は假の宿、心をとむるな。江口と、聲々に呼びければ、五兵衛引返し、鍵を合せ、二三人突伏せ候處へ、上杉方志賀五郎右衛門突懸り、散々に戦ひて、遂に五兵衛を突伏せ、首を鍵先に高く差上げ、城主江口五兵衛をば、上杉内志賀五郎右衛門、討取りたるぞと呼ばはりける。城方の兵共、江口小吉・同忠作・飯田播磨守・新開又右衛門・小野田與八郎・幡屋藤太郎・同清左衛門・堀藏人等五百計り、面も振らず、上杉の多勢へ馳懸け〜、火〔花脱カ〕を散らし戦ひけるを、上杉勢、新手を入れ替へ〜、攻め入りつゝ、大方残なく討留めけり。飯田播磨守をば、上杉方夏目軍八討取り、新開又右衛門は、水野藤兵衛討取り、幡屋清左衛門をば、宇佐美民部討取り、江口忠作をば、宇佐美藤三郎討取りける。其外、五百餘の

城方、皆二の九にて討たれつゝ、幡屋は落城したりける。十三日の辰の上刻に、城を攻め取り、直江は、幡屋の城へ入り、勝鬨を揚げたりける。前田慶次郎は、搦手より乗込み、落ちて遁れ出づる敵共、八人討留め、家人共に持たせ、直江が旗本へ遣しける。直江は、手合に幡屋の城を攻落し、纜を揺り悦びつゝ、下知しけるは、敵の臆病神のさめぬに、押入れや兵者共、破竹の勢失ふべからずと、息をも繼がず打立つて、最上方の小城共、長谷堂の城迄の間に、廿三館構へけるを、押寄せ攻めけるに、景勝の猛威に聞おちし、又は今朝、幡屋の城、一時乘に攻め落されしに恐れつゝ、防ぎ矢射て、皆落ちければ、上杉勢、勝に乗りて進みつゝ、十三日辰の刻より、同日の暮合迄に、最上の小城廿一館迄攻め取りける。討取る首數三千四百七十餘とぞ注しける。如何なる天魔鬼神なりとも、上杉の鋒先に、面を向くべしとは見えざりける。廿一館の落人共は、谷の城・寒河江・長谷堂の城、扱は山形の城へぞ逃げ入りける。最上方の軍兵共、昔より五千三千の坪軍には遇ひたれども、斯程に厳しき事にあはずと、皆逃足にぞなりたりける。坪軍とは、地取合の事なり。奥州出羽の言葉なり。直江兼續は、一日の中に、幡屋の根城を始め、小城廿一館攻め取り、討取る首共實檢し、須川の流にて、太刀・刀・物具の血を洗はせ、野陣

を取り、大篝廿八箇所に焚かせ、人馬の息をぞ休めける。

斯くて、關東方には、木曾街道より、十五町北に當つて、曾根の城あり。此所には、關東より西尾豊後守忠政在城す。江州より街道北の地は、東國勢、陣を張つて大垣を壓へけり。扱曾根の城は、東海道の傍かたはらにして、大事の手當なれば、松下右兵衛を加勢とす。然れども、軍用の程、毎度不足なる由を、井伊・本多聞き傳へて、松下を陣替へさせ、水野六左衛門・同舍弟惣十郎を、豊後守に加へて、木曾街道を阻て、對陣す。松下丹波守・津輕右京は、江尻の郷に屯して、笠縫繩手の通路をば、最も厳しく差塞ぎけり。斯かる處に、治部三成は、年來の家の子林半助を召寄せ、あたりの者を退け、囁きけるは、其方、年來の忠節おしよ推量つて、委細を知りぬれば、わりなく所望する事あり。叶へてんや否やといふ。半助、頭を地に付けて申す様、事新しき御誕にて候。其の身に叶はん御用をこそ、日頃年頃、偏に願ひ罷在り候へば、斯かる不肖の某に相應ならん御用をば、争でか辭いなみ奉らん。仰の程こそ、恨めしく候へと、眞實の志、顔色に顯はれしかば、三成一入喜悅して、別なる儀にあらず。其方が一命を、我にくれよといふ事なり。元來、曾根は汝が生國なれば、何卒思案を廻らして、百姓・浪人等を相語らひ、

曾根の城の搦手へ、夜に紛れて忍び入り、火を懸けさする術をせよ。然らば、水野・西尾が軍兵共、火元へ馳集り、馳廻りて騒ぎ立てんは必定なり。其時、火の手を相圖にて、軍勢を引率し、早速に押懸けて、曾根の城を乗取るべし。偏に頼むといひしかば、半助聞きて領承し、御心安く思召し候へ。幸に馬淵兵左衛門と申して、物に馴れたる忍びの者候。元は氏家志摩守家來たりしが、故ありて浪人致し、呂久村に罷在り、私無二の知音にて候へば、渠と深く相計り、随分方便を廻らして、必ずしおほせ、本意を達せしめ申さんというて、我が陣所にぞ歸りける。扱兵左衛門を招き寄せ、件の有増を、内談し申す様、三成の仰にも、其事首尾能く遂げられなば、秀頼公へ言上あり、御馬廻りに召出して、過分の俸祿與へ給ふべしと、堅約の事なれば、随分働き給へといふ。馬淵、委細を聞届け、三成殿の御心底、近頃喜悅至極せり。去乍ら、此企、卒爾にしてはなり難し。敵味方の對陣間近く、程なき事なれば、遠見、夜廻り、暇もなく厳しく番をするなれば、仕濟す事は優曇華なり。然れども、味方に多くの人を差措かれ、我等風情に、隔心なく、大事を仰ある上は、敵方に生捕られ、しゝびしほになるとても、惜むべき身にあらず。爰に高田何某横山太兵衛といふ者、某、若年よりの友に

て殊更斯様の事に、心懸の鍛錬ある者にて候へば、彼等を伴ひ、忍び入り見申さんと、功者にぞ聞えける。半助、具に聞届け、三成に對面して、右の趣、一々に首尾を合せ、執なしければ、頼母しくぞ覺えける。三成、聞いて申しけるは、随分、身命を抛つて、よく事を遂げ申されよ。我れ斯くてあらん限は、縦ひ其身は果つるとも、子孫の末迄も見放さず、取立て得させん。是は當座の褒美とて、黄金三枚取出し、半助に渡しけり。夫より晝夜會合して、評議をぞしたりける。馬淵が了簡には、夜中は別して、番等も繁からんと存ずれば、何卒、謀を以つて、晝の間に紛入り、よき時分を待ち申さんは、如何にやといひければ、此儀、尤も然るべしと、彼是方々窺ひ居る處に、其頃、赤坂表の陣所、竝に曾根の城の兵糧、次第に盡きければ、在々へ入渡つて、田を刈る最中なり。此人夫に打紛れ、忍び入らんと議定して、九月十日の中、刻計り、瀬古村の北の邊の田を刈る人夫に紛れ、彼方此方と窺ふ處に、折節、刈田の奉行、目の利きたる士にて、彼者共の行跡は、人夫體の者ならず、鎌の持様・稻さばき、曾て手馴れの業と見ゆ。其上、眼ざし、只者にあらずと、見咎め、敵方の奴原が、紛れて入りたると覺えたり。其手其組の人夫を、點檢せよといふを聞きて、三人の者ども、頓て其場を駈出し、

二人は東へ逃げて行き、今一人は、西の方會根を指して逃げけるを、奉行の士下知して、やれ討取れくと、聲々に呼ばはりて、兩方へ追駈くる。近郷の者共迄も出合ひ、追駈けたり。二人は水練の上手にて、水を游いで逃げ延びぬ。今一人は追詰めて、斬らば斬るべき程なりし處に、跡より聲をかけて、討つな生捕にせよと呼ばはる内に、瀬古村の名主宇野左近右衛門といふ者が、屋敷の内へ飛入りけり。此所には、豊後守の姉娘綾野殿といふ方を、名主の屋敷を圍ひつゝ置かれけり。其の所へ彼の賊徒駈入りて、綾野殿を引き寄せ、胸に白刃を差當て、人質に取りければ、追手の者、押込んでも搦むべき様なし。西尾・水野が兩軍勢、雲霞の如く駈け來つて、名主が家を取巻いても、危き仕業なれば、詮方なく、何れも胸を冷してぞ居たりけるが、名主、賢き者にて、女房によくいひ含め、いはせけるは、其方は何國の人、いかなる譯に依つてか、斯くは仕給ふぞや。若し誤なき身ならば、其様子をいうて歸られよ。我は、此家の女房なり。亭主は、慈悲を第一とする人なれば、縦ひ科ある人なりとも、能き様に取持ちて、其罪を宥め給ふ様に申さるべし。増して誤なき人をや。唯有體に、亭主を頼み給ふべし。努々相違あるまじと、神をかけ佛に誓ひて、實まことしやかに申しければ、彼の者、實

にもと思ひて、されば、某は、馬淵庄左衛門とて、呂久村に居る者にて候が、豊後殿の御家中に、某同名の權右衛門と申す者、親類にて候故、對談の内參加せしむる處に、理不盡に追ひ駈けられ、途方にくれて、是非なく斯くの仕合に候。兎も角も、宜しく頼み存するとして、騒がぬ氣色なれば、則ち權右衛門を召寄せ、彼の者を見せける處に、如何にも、以前より存知の者に候へば、それがし、願ひ申さんに、何の祟のあるべきや。心安かれ。兵左衛門御咎めあるに於ては、一所に科を受くべしとて、先づ太刀を納めさせ、人質を放させて、豊後守に、此を斯くと申しければ、急ぎ城へ召し寄せて、仔細を問へども、曾て又別條なしと陳じけり。豊後守これを聞いて、仔細もなき其身にて、人が追へばとて、何故周章て騒ぎて逃げけるぞ。其の上、人質を取るからは、別條なしとはいはるまじ。兎角をいふまで責めよと、拷問既に度重りければ、是非もなき次第とて、三成が謀、半助が頼みの品、始めより終まで、一事ものこらず白狀せしかば、みごらしの爲めにせよとて、木曾街道の境目に、梟首にこそはしたりける。

直江山城守諸大將と軍評定并長谷堂の城を攻む

附最上義明、後卷對陣の事

明くれば、九月十四日に、直江兼續は、諸大將と評定し、最上義明の居城山形を、攻めんとぞ謀りける。時に、三番手の大將上泉主水正憲元一説道治始は、武州深谷の領主上杉左兵衛佐憲盛の家老にて、若年の時分、淺黄しなへ筈をさし、大鹿毛といふ名馬に乗り、利根川の先陣を渡し、大敵を攻め破りし武功、其外、度々の場數これあり。既に北武藏・東上野にては、淺黄しなへ筈をさす事は、憚り遠慮する程の剛の者なり。深谷殿小田原落去の時分、没落せられ、上泉も浪人となり、景勝上杉の一門たるを以て、奉公に出で、萬石組共に、給はりけるが、進出でて申しけるは、山形の城を攻められん事はよくく了簡あるべき事にて候。城の西南は夥しき深沼にて、人馬の足、及ぶべからず。東北は、要害堅固にして、堀三重に柵五重なり、矢倉三十餘箇所にあげたり。殊更、最上義光が先祖は、足利尾張守高經の弟、斯波伊豫守家兼が、子修理大夫兼頼、延文元年八月に、尊氏公より、出羽の國司に任せられて、山形に居城を

定めしより以來、今義光に至つて數十代、國富み人懷き、譜代の兵數萬人、弓・鐵炮・兵具其數を知らず。皆義を重んじ、名を惜む兵共なり。卒爾に攻懸り給はゞ、大事に及ぶべく候。暫く是に控へて、行を廻らし、動靜の機を窺ひ給へとありしかば、直江・杉原・松本・春日・五百川等の諸大將、うけがはずして申しけるは、今度、大軍を催し、此國に討入る事、山形並に東根の城を攻めん爲めなり。貴殿今、山形の城要害よく、最上の軍兵の剛強なる事を述べらる。是皆、多年に存する處なり。但し、山形を攻めざる則とせんば、幸に手近の長谷堂を攻め落すべし。兎角、何處へなりとも、取りかくべし。手を束ねて、日を送るべき様なし。貴殿は、上州・武州の名家、自分にも勇士と許さるゝ人の、唯々の御言葉は、相違にて候と、口々に申しければ、主水は、卒忽なる事をいひ出し、當座の恥辱と思ひ赤面し、無念色に顯はれ、心中には、兎角討死とぞ極めける。されば長谷堂の城を攻めんとて、明くれば十五日辰の刻、上杉の諸軍、長谷堂の城へ押寄せける。直江兼續、二萬餘にて長谷堂の城より、十九町隔てたる菅澤山に陣を取り、上泉主水三千五百餘は、龜越山に陣を取り、長谷堂の城より、十四町を隔てたり。春日右衛門尉九千餘は、小山崎に陣を張り、長谷の城を攻めんとす。此城には、最

上方志村伊豆守守れり。小勢なるにより、義光より加勢として、酒延或鮭延ともあり越前守氏江九兵衛・富南相模守・東根常陸介に、精兵八千添へて籠められたり。長谷堂の城は、山形の城より二里、上の山の城より二里、上の山の城へ一里半なり。山形の城と、上の山と相去る事三里、山形は、天堂の城よりも三里なり。上の山の城は〔中カ〕山形の城の南に當れり。大堂〔天カ〕は北に當る。皆鼎足の形にして、犄角の勢をなせり。庄内の領主甲利八郎國盛も、其以前、上杉家老本庄越前守繁長と數年取合ひ、繁長に攻め付けられ、降參して景勝に従ひしが、此度、最上義光の謀により、又は美濃國岐阜落城、江土川の合戦に、東國方、勝利を得給ひたりと聞きて、心を變じ、景勝を背きしかば、直江兼續より、下次右衛門を大將にて、五百餘の兵卒を、庄内より廻し、屋地の城へ取懸け攻め落し、夫より押入りて、千村・境村に陣を張りけり。此境村は、山形より四里の西にて、長谷堂も山形の西南にありて、米澤に向ひたり。上杉勢長谷堂の城へ取懸くべしと聞えしかば、最上義光も、屈強の兵二萬餘を率して、山形を出で、後卷として長谷堂に著陣し、城より二町隔てたる稻葉山に陣を取り、直江と對陣せり。さる程に、上杉勢は、最上義光、後卷に出張したるも、事ともせず、諸軍を手分けして、四方よ

り手を合せ、大筒を放し、関を揚げて攻め懸る。城中も、爰を先途とぞ防ぎける。直江兼續、諸大將に下知して、井樓十餘箇所にあけて、城中を見下し、築山を築き揚げ、銀掘かねほりを入れて、矢倉下へ掘入り、竹束仕寄り、透間なく、喚き叫んで攻め近づく。城方、評定しけるは、景勝が兵、猛く勇むのみならず、合戦に馴れたる體、輝虎の遺法を請け、其強き事、一騎當千とも謂ひつべし。城外へ出でずして、堀裏を持ち、矢狹間配りして、鐵炮にて、打立てよとぞ下知しける。城主志村伊豆守高治が家老、大風右衛門・横尾勘解由、主人に向つて申しけるは、此城、小勢なるを以て、八千の加勢を入れられ、其上、山形より太守義光御自身、御後卷にて、城外稻葉山に、御陣を召され候に、我々此城の主として、上杉殿に卷き詰められ、をめくると、堀裏計りを持つて、防ぎたる計りにては、諸人の思ふ處、第一は、屋形義光の御心底も恥しく候。我々斬つて出で、一と合戦仕るべしとありければ、志村も、汝等が存する處、又餘儀もなしとぞ同じける。是に依つて、屈強の兵二百餘騎にて、斬つて出でんと支度せり。此攻口は、上杉方上泉主水、三千餘にて控へたり。上泉が陣の右二町計りに、宇佐美民部、其勢四百餘にて、備へたりしが、城中の有様を見て、嫡子宇佐美藤三郎、後兵左衛門尉と號す十六歳になりける

を使ひとして、上泉主水備へ、申遣しけるは、城方、遣付^{おつ}、定めて出づべしと覺え候。御心得あるべく候へども申入れ候。上泉は、城の相色に心を付けず。宇佐美は、何事を申越したるやらんと、思ひけれども、心得候と計り返事しけり。されども、宇佐美藤三郎、父の備へ歸らず、是に罷在り、手に合ひ申したしといふ。主水は早々手分の備へ、歸られ候へといふと等しく、ひた甲二百餘、大手の門を開き、一度に突いて出でたりける。上泉主水も、取合せ鍵を入れ合ひ、地煙を立つて突然矢・鐵炮を打合ふ事、霰の降るが如し。上泉が先駈大高六右衛門、大高階氏にて、高市皇子より峯緒が後胤大高伊豫守重成末孫紀州大高源右衛門伯父なり、一番によき首を取りたりける。信太内匠・石谷半内、續いて高名し、何れも甲首を差上げたり。宇佐美藤三郎も鍵を合せて高名し、首を取る。上泉下知して、當方より横尾・大風が二百餘を押包んで攻めければ、大風・横尾打負けて、城中指して引入りける。上泉追駈け、屈強の兵十四騎歩者廿餘人討留めける。上泉が手にも、精兵十二騎・足輕歩者卅七人討たれける。直江備より、漆木采女・坂田主税駈付け、兩人共に組討の高名なり。宇佐美民部も、我備をば少も亂さずして控へしが、自身乗付け、上泉が手先にて、是も能き首取りにけり。直江は諸軍に下知して、絶井樓・龜甲車・菱・向城の支度事

急なり。大工數百人にて晝夜拵へければ、鑿槌の聲城中へ聞え皆怖の思をなせり。

最上義明加勢を伊達に乞はるゝ事附政宗加勢の事

井上杉方松本木工之助討死の事

始め義光は、景勝の大軍、寄せ來ると聞きし時、子息修理大夫家親に申されけるは、此度、直江山城守大將にて、四萬餘の軍兵を引率し、攻來る由なれば、勢は定めて、雲霞の如くなるべし。我は山形の城を持ちて、なるべき程は防ぎ戦ひ、叶はずば腹を切るべし。其方は、早々奥州岩手澤に赴き、加勢を政宗に乞ひ候へ。但し我が姉は、政宗が實母にて、其方と政宗從弟なれども、先手、鮎貝藤太郎事にて、政宗と中惡しき事多年なり。既に弓矢、數箇度に及へば、中々合點仕るまじとは、思ひしかども、政宗も、關東方無二の味方なれば、我が告を聞く時は、關東の後聞を憚り、加勢あるべき事必定なり。其内、山形落城せば、我は討死すべし。其方は生き残りて、家名を相續仕るべく候。父子一所にありて、討たれん事、いひ甲斐なき事なりとて、今生の暇乞の盃を取替はし、家親は馬に打乗つて、奥州岩手澤指して赴

最上義明加勢を伊達に乞はるゝ事附政宗加勢の事
井上杉方松本木工之助討死の事

きけり。九月八日に、岩手澤に著きて、政宗に對面し、家親申されけるは、此度、關東の御下知により、義光も軍兵を催促し、米澤口より會津へ取懸け申すべしと、支度仕り候處に、此度、治部、大坂へ討つて出で、京都畿内之に一味し、伏見の城を攻め落し、既に治部が先勢、美濃口に充滿に付き、關東の御勢、會津攻を止められ、江戸へ引入り、上洛仕られ候。是に依つて、直江山城、其利に乗り、此暇を窺ひ、四萬餘の軍兵にて、近日、最上を攻潰すべき支度の由、申し來るに付き、味方にも數箇所の砦を構へ、待受け候へども、大敵なれば、此方打負けん事、必定なり。事新しき申條に候へども、貴殿の御母堂は、我が伯母なれば、從弟の好み淺からず。然れども、先手鮎貝藤太郎が事により、伊達・最上確執に及ぶ、敵味方となり、數年争ひ戦ふ事、頗る本意にあらず。此度直江、最上を攻め平げ候はゞ、即ち猶下湯の原へかゝり、岩手澤へ取懸り候はん事、隴を得て蜀を望むの勢、とゞまるべからず。後漢光武帝賜三竿彭書、人若不_レ知_レ是_レ既平_レ隴蜀。是_レれ所_レ謂唇亡_レびて齒寒_レきの譬なり。今度、多年の宿意を咎め給はず、加勢を出され、最上の急難を救はれ候はゞ、外は關東への奉公、内は一家を救ふ所、名實共に至き所にて候。正に今、最上大事に及び候に、貴殿加勢なく、一旦、直江、最上攻め取り候はゞ、何の面目あり

て、御所へ見えられ候はんやと、理を盡して申されければ、政宗聞きて、尤も至極と同心し、追付、加勢を出し申すべく候間、貴殿は父義光と一所に、山形を持たれ候へと、家親を返し、則ち最上へ加勢を差越しけり。伊達上野介・津田豊前守・保土原江南軒・大條薩摩守・與倉紀伊守・大嶺式部丞・鹿股大藏丞・遠藤但馬守・石川彌兵衛・青木掃部・新館肥前守・青木勘四郎・佐々部淡路守・小野雅樂助・小野彌左衛門・堀野彌角等、其勢四千餘、武山出雲守・成田左馬助軍奉行として、岩手澤を打立ち、夜を日に繼いで、最上へぞ急ぎける。政宗總軍は、旗の紋に、琵琶面を書きたり。我は琵琶なり。敵ひけといふ事なり。政宗も、一萬五千にて、押續いて打立ちつゝ、九月十五日には、最上長谷堂口に著陣し、文田村に陣を取りたりけり。最上方、勢を振て見えにけり。直江は、伊達の大軍、文田村迄出張りたるも、事ともせずして申しけるは、今朝城中より、大風・横尾斬つて出でたりけるを、残りなく討留めざるこそ口惜しけれ。此上は、ひた攻に攻めよと、下知しければ、春日右衛門尉七千餘騎、竹束をかつぎつれ、城中へ攻寄せつゝ、柵を抜き、亂杖を取除け、喚き叫んで攻懸る。直江は、高き所に打登りて、大筒五臺集めつゝ、城中へ放ち懸けゝるに、一抱計りの木を、中みちんに打碎き、殘る玉、矢倉にあ

最上義明加勢を伊達に乞はる、事附政宗加勢の事
井上杉方松本木工之助討死の事

たりて、壁二間計り打破りけり。其音、千雷の震ふが如し。長谷堂城中の男女、一度に聲を揚げてぞ騒ぎける。春日右衛門、是に利を得て、城門を攻め破つて、攻め入りけるに、城中より志村伊豆守・鮭延越前守、逞兵三百餘人、眞黒に斬つて出でつゝ、春日勢を追出さんと進み懸り、爰を先途と戦ひける。互に手負・死人は數を知らず。左右の櫓と、向うの塀より、雨の降るが如く、鐵炮を打立てければ、春日が勢、門外へ二十間計り退り、ひた／＼と地に折りしき、鎧を伏せてぞ休みける。上杉方より、松本木工之助百餘、春日に入替はらんと追ひける。志村伊豆守、新手の替らぬ前に、春日を追立てよとて、斬つて出でけるに、上杉軍法にて、疊陣といふ物に立つ春日が備は、唯大山の如くに立つ。同じ虎口の兵共は、鎧を膝車に乗せて折りしき、其次は、鐵炮を立て並べ、折り立つ事甚だし。是に依つて、城方、懸りかねて、見えける處を、松本木工之助七百餘、横合に懸入りける。志村も、松本と懸合せ、押しつ押されつ戦ひけるを、松本、自身鎧を入れつゝ、上鎧になりて、二三人突倒し、曳々聲を揚げたりけるに、志村が勢、崩れ立つて城中へ引退く。松本勝に乗りて、志村伊豆を追ひ立て、逃ぐるを追うて、城中へ攻め入りけるを、黒四半に、朱の山道書きたる指物にて、鮭延越前守と名

乗り、手勢二百計り左右に立て、越前守、大長刀を水車に廻して、斬つて出でけるに、松本、是と渡り合ひ、追込め追出し、一時計りぞ戦ひける。松本、深入して三箇所迄、深手を負ひ、爰にて討死したりける。此手の兵共、大將を討たれ、當の敵を討たんと戦ひける程に、松本が兵、八十餘討死し、殘兵は門外へ引取りけり。城方には、木工之助が首を、鎧先に刺貫き、高く差上げ、上杉家の侍大將松本木工之助を、討取りたりとぞ悦び、景勝方には、松本木工之助を討たせ、此口の寄手、少し引退きけるを無念に思ひ、直江一萬餘、上泉が勢を先立て、春日に入替りて攻懸かり、手持楯てう楯竹束・龜甲を以て、附寄せ／＼攻め近づき、十五日未の刻より、夜中に至る迄、新手を入替へ／＼、十六日の夜中迄、息も繼がず攻めたりける。廿七日の朝迄も城中防ぎ戦ひて、弱る氣色なかりければ、直江は、色部長門守・高梨對馬守三千餘を、城の背の高山へ押登せ、頻に鐵炮を打懸けさせける。城中、鮭延越前・東根常陸介・新開備前守二千餘、昨日の勝軍に利を得て、城の搦手の門を開き、驀地に討つて出でたりける。上杉方色部・高梨、天の與ふる所なりと悦び、山より下り立ちて、突いて懸りければ、城方まくり立てられ、引入りけるを、上杉勢引付けて攻入りつゝ、城方の侍大將新開備前守を討取り、其

最上義明、加勢を伊達に乞はる、事附政宗加勢の事
井上杉方松本木工之助討死の事

外、屈強の兵百九十一人討取り、搦手の外張を踏み破り、勝鬨を揚げてぞ歸りける。直江は、新開備前守が首を得て、鎧の先に刺貫き、高く差上げ、最上方の大將新開備前守を、討取りたりと呼ばはつて、昨日の松本木工之助が仇を、報じたりとぞ悦びける。昨日の卯の刻より今日夜半迄、息も繼がず攻めたりとぞ悦びけるに、城中雜人・女童も討たる、時は、念佛を唱へ、わきかへり喚き叫びつゝ、又攻め止めば、其間には、暫く息を休めける。唯地獄の苦も、是には増さらじとぞ見えにける。直江は、赤澤山に旗を立てさせ、政宗の陣所文田村を見下し、諸軍を手分けして、四方へ遣し、焼働きを致させけるに、最上領には、上杉の諸軍入渡り、堂社・佛閣を打破り、在々所々を焼拂ひ、自由に横行す。眼中、既に政宗・義光を蔑如にして、威を振ひけれども、政宗も、義光も、頭を差出す事なかりける。されども、長谷堂の城、要害甚だ堅固にして、山高く谷廻り、攻め上るに自由ならず。城下に淵川の流ありて、峯峙ちければ、進み難し。上杉勢、剛強にして殊に大軍なりけれども、攻落し難くして、徒に日をぞ送りける。

上の山の城口合戦附上杉方穂村造酒允討死の事

景勝は、會津にありて、最上に心許なしとて、中山式部を大將にて、四千餘の軍兵を、重ねて最上へぞ遣しける。中山、四千の士卒を引率して、上の山筋へ懸り、攻入りける。上の山の城には、最上方里見越後守・同民部楯籠りける。直江兼續は、景勝より加勢として、中山式部攻め來る由を聞きければ、兼續よりも、穂村木村と上杉家の侍帳にあり造酒允・篠野井彌七郎、三百餘兵を遣して、中山に手を合せ、上の城へ働かせけり。其勢山脱既に中の山口へ打出でける。中の山と上の山の間は、小篠交り茂み深き谷あつて、甚だ切所なり。爰を川口と名づけたり。上の山の城主里見民部は、草刈志摩守七百餘人を、繁みにぞ伏せたりける。上杉勢、之をば曾て知らざりけり。中山式部・穂村造酒允・篠野井彌七郎軍兵を率し、亂妨・刈田を致しけるに、上杉家の軍法にて、法令甚だ嚴密にして、毛頭濫なる事なし。穂村・篠野井兵を發して焼働き、刈田を致す則よきんば、中村式部、備を眞丸に立て、唯今敵に向ふ如くに致し、又中山・刈田焼働き致す則よきんば、穂村・篠野井、丈夫に備を立固め、少しも濫なる事なし。互に警固をなして、

急を待ち、三里四方、〔刈カ〕前田働放火をなし、皆二隊一手になりて、上の山城へぞ攻め懸りける。直江も、重ねて三千計り、加勢を差越しければ、中山、穗村に追ひすがうてぞ進みける。里見越後・同民部も、城より出でて待懸けたり。最上義光も、坂上紀伊守に三千餘兵を差添へ、上の山の城へ分ちありしかば、里見、此勢を合せて討つて出でたりける。上杉方穗村造酒允、先手にて取懸りたり。造酒允、元より剛の兵なりければ、軍兵を下知し、其身、眞先に進み出で、弓鐵炮にて打合せける。午の刻より未の刻迄、互に雌雄を争ひけるに、未の刻に至つて、敵の陣、殊の外騒がしく見えければ、頓て合戦始まるべしとて、中山式部・篠野井彌七郎、高見へ押出しける處に、最上方俄に紅の吹貫を差上げたり。是は如何にと見る處に、相圖にてありけるが、川口といふ谷際より、伏兵五箇所に立起り、尾崎より峯筋に取上げ、鐵炮にて打立て懸け入りける。爰にて上杉方推野彌七郎討死せり。直江が軍兵、未明よりの遠駆とほりけはたらきに草臥れければ、過半裏崩れ、岸がけより墜つる者數を知らず、皆我れ先にと崩れ行く。最上方、勝に乗りて追ひ懸けたり。日既に暮れかゝりしかば、直江が軍兵ども、返合せて踏怵へ、備を立てる兵共、長柄を立て持鍵をば伏せつゝ、皆座備にて、急度返して答へける。

其陣の勢は、例へば大山が崩れ懸るとも、亂るべしとは見えざりける。最上勢も、追止り、備を立て、對陣せり。上杉の兵高濱彈正は、鐵炮の手垂なれば、頻に鐵炮を打懸くるに、仇矢はなし。時に城の大將里見越後守、耳坐紺の鎧に、月毛の馬に乗り、先陣に進み下知しけるを、高濱彈正見て、大將と心得、鐵炮にて打ちたるに、目あて下り、里見が馬を打倒しければ、弓杖にすがり下り立ちたり。歩者四人走り寄り、松の二三本ありける蔭へ、里見を引入れ、小楯に取つて答へけり。之に依つて、最上方の陣、色めき渡り騒ぎ立ち、上の山の城より、頻に使を差越し、人數を引取り候へと申來る。上杉方には、之を推量し、直江が勢も、中山式部が勢も、其引足を突崩さんと、待懸けければ、最上勢も人數を引取る事叶はず、進退爰に谷まりける處に、最上方坂彌兵衛〔細州里見勘四郎從弟〕朱具足に、黃練の四半を差し、鹿毛ぶちの馬に乗り、唯一騎にて、敵味方の際へ乗込み、最上勢をたゞき、上足をも亂さず、二町計りぞ引取りける。上杉の先手穗村造酒允、塵を振つて士卒を勵し、追討たんと下知しけれども、上杉勢、人馬共に疲れ果て、追討つ事も叶はず、立起きたる計りなり。造酒允、大に怒りて、我れ進んで、彼の敵を取らんと、馬を馳せて追駆けたり。最上方後殿の兵者坂彌兵衛轡を引返

し、造酒允に渡り合ひ、互に鍵くみ、二つたゝき合ふとぞ見えし。彌兵衛が鍵、造酒允が胸板のはづれに當り、馬より下にどうと落ちけるを、彌兵衛、馬より飛下り、無手と組みついて、造酒允が首を取つて差上げたり。最上諸軍、一同に勝鬨を揚げて悦びける。其聲、山に響きて夥し。穂村一備、色めき立つて崩れけるを、里見越後守・同民部丞等、得たりかしこと、抜きつれて懸りければ、穂村造酒允が軍兵共、主を討たせ、立足もなくなりけるを、里見が兵共、追ひかけて斬り伏せ突伏せて、討取りければ、穂村が勢、或は岸より落ちて死するもあり。引返して討死するもあり。手負死人數を知らず。篠野井彌七郎は、相役の穂村を討たせ、無念に思ひければ、馬を早めて乗付けしに、矢一筋左の肩先に立ちたりける。彌七郎、其矢を抜き捨て、二尺八寸の備前元重の刀を、眞甲に差しかざし、上杉景勝が侍篠野井彌七郎と名乗つて、手負猪の如く、齒がみをして、眞黒に懸りけるを見て、里見が勢、追止まりて進み得ず。中山式部も、人數を三段に立て備へしが、最上勢の追ひ來るを望み見て、ひたひたと鍵しとを作しき、鬨の聲を揚げて懸りける。里見越後守、此勢を見て、人數を引纏ひ退かんとせし處を、穂村が軍兵二百餘、主の仇を報せんと、馬の鼻を並べ、鍵先を揃へて喚いて

こそは懸りけれ。最上の諸軍しどろになりて、過半裏崩れして、見えし處を、穂村が兵共、鍵を入れければ、篠野井彌七郎、麾を取つて三百餘人、横鍵を入れ立てければ、最上方、ぱつと崩れ、上の山の城をさして、人なだれをついてぞ、逃げたりける。穂村、篠野井が軍兵共、遁ぐるを追うて、透間もなく懸りけるに、城戸口に支へられ、入る事を得ず。穂村、篠野井が兵共、急に攻め付け、附入にせよと、呼ばはりけるに、義光よりの加勢、中山駿河守、眼を瞋らし、士卒を下知して、門を打ちたりければ、逃入り懸かる軍兵門外に立出だされ、途に迷ひ堀を越え、柵を登り逃入りけるを、穂村が兵と、篠野井が軍兵と、立ち狭んで討取りける。城中は漸く城を持泳へたるを勝にして、鐵炮を放ち防ぎけり。今日の合戦に、最上方屈強の侍百八十九騎、討たれければ、景勝方にも、二百三十餘騎討死しける。骸は山坂に充満し、流るる血は、叢を染めなして、紅葉の色をまじたりける。最上方諸大將、皆稱歎して申しけるは、謙信・景勝、兵を用ふる事、神の如し。陣中法度正しく治まり、士卒剛強にして、戦を能くする事、年來聞き及びしが、此度、軍を取り結びて見るに、兼々聞き及びしにも勝りたり。古來より剛強なる弓箭の家、上杉に優るはあるまじと、諸人舌を振つて恐れけり。去る十三日

より十七日に至つて、都て五日の間に、日々に合戦して、互に勝負相替る。然れども、景勝には、物頭多く討死し、其上、政宗、大軍にて義光を助け、近々と陣を張りければ、直江も、山形・長谷堂を攻め平ぐる事叶はず。されども、日々に人数を出し、最上領内を、縦横に働き、村里を攻め破り、小城・小館を攻取り、國中に充滿ちて、合戦止む時なし。直江が人数の向ふ所、其鍵先に當る者なし。十八日より廿四日迄七日の間に、最上の寨・小館七箇所迄攻め落し。首數三千餘討取りける。況んや此度拵へたる寨共は、一つも残らず、直江に攻め落され、今は、長谷堂・谷・寒河江・上の山・山形の城五つ計りを残りける。義光も、晝夜心を苦めて、防戦の行をいたしける。

上泉主水討死の事

九月廿四日の朝、直江兼續は、諸大將に向つて、長谷堂の城下に、少しの湖あり。四五町にも及ばず。我れ之を推量するに、谷口を堰ぎとめて、澗水を湛へたると覺えたり。先づ斥候を遣し、其様子を見するべしとて、二隊遣しけり。一手は、城下の在々所々を放火し、一手は、

件の湖を窺はせけり。然る處に、長谷堂の城より、ひた甲八百餘、上質戸を開き、城外へ打つて出で、彼の湖を涉りて懸り來る。直江が軍兵もひたくと鍵を伏せて、あひて相懸りに進む。城方も鍵衾を作りて待ち懸け、既に鍵始めんとぞ見えたりける。直江、遙に之を見て、大きに怒り、使を遣して、斥候にこそは遣したれ。何とて軍法を破り、戦を取り結ぶぞ。早引取るべき旨、追々に申遣しけれども、敵味方互に迫り寄つて、鍵二長計りに立ち堪へ、互に退く事叶はず。使も歸らず、兩方の矢・鐵炮は、雨の如し。彌、先手に集りて、先勢になりければ、互に取口ありて、引取る事を得ず。既に鍵合すべきと見えたりけり。時に、上泉主水、組下二十騎計り連れて、直江が旗本へ來る。山城守、主水を來り迎へて、貴殿、幸の所へ來り給ふ者かな。今程、若者どもを遣し、湖水を物見させ候處に、城中より出で喰留め申し候間、貴殿御越し候て、我が人数を連れて、御歸り給はり候へとありければ、上泉、仔細にや及び申すべきとて、手鍵追取り、馬を早めて馳せ行きけり。其組下大高六右衛門、馬を横に立て、主水に異見しけるは、御身は大將にて、輕々しく無用にて候。我等罷向つて、先手を引取り申すべしとて、馬を乗出しければ、主水も續いて乗行きけり。其組下の浪人共、如何したりけ

ん、馬を控へて進まざりけり。宇佐美民部、馬を乗り寄せて、上泉が組の侍に向ひて、各は流石に勇士の名を得られし方々にて、大將上泉を見つぎ給はずば、後難あるべしと、申しけれども、高濱彈正を始めて進まざりければ、宇佐美民部其子藤三郎・蓼沼日向守・石坂與五郎等、二十騎計り駈向ひ、上泉主水・大高六右衛門は、既に湖ばたへ乗付け様に、取組みたる上にては、物放れなり難き者ぞ。先づ一合戦せよとて、主水、馬より飛び下りて、鎧を取つて懸りければ、兩方の兵共、皆立起りて鎧を合す。主水は、鎧を繰出し敵を追ひ拂ふ。其隙に人數を引取らんとす。城中より富南相模守・氏家右近等三百餘、二の木戸より討ち出で、先手に加はり、直江が勢を喰留めける。政宗が加勢伊達上野介・石川彌兵衛七百餘、横合に懸けて攻め戦ふ。直江が先手、敵を二方に請け戦ひけるが、上泉主水は、眞先にありて合戦を始め、互に命を輕んじて挑み戦ふ。鐵炮雷の如く、一足も引くなと恥しめて、火花を散らし攻め戦ふ。景勝の兵共、討死數百人に及びしかば、伊達・石川、眼を瞑らし士卒を勵まし戦ふ。上泉・宇佐美・大高・蓼沼・石坂等、叫び呼ばはりて、押立て、攻め懸り、政宗の軍兵三十餘騎、討取りしかば、伊達上野・石川彌兵衛も、半町計り引退く。されども、石川彌兵衛、麾を振り

取つて返し、散々に戦ひ、上杉方には、前田慶次郎・股沼大學・宇佐美民部其子藤三郎・蓼沼日向守等、各、心を一つにして、力を合せ躍り懸り、先登を争ひ、合戦、時を移しける。上泉主水、先陣に進み出で下知をなす。其志、討死せんと申すに寄り、弓矢鐵炮の音、関の聲、矢叫の音、山を動し谷を響かす。直江兼續彌、怒つて、軍奉行杉原常陸介親憲を使にして、上泉へ申しけるは、日暮れて、合戦なり難く候。早く引取らるべしとありしかば、上泉は、心得候。人數を控へあげ召連れ、只今、夫へ參るべしとて、杉原をば戻し、其跡にて唯一騎、敵陣へ駈け入り、猛威を振ひ斬つて廻り、十餘人斬り伏せ、近づく漆山九郎兵衛と引組んで、馬より落ち、上になり下になり、遙の谷底へ落ちにけり。落著きさまに、主水、妻手差を抜き、漆山を一刀突いて、二くり三くり繰りければ、漆山はのつけにかへし、又下の谷へ落ちにけり。主水も、精力盡き息きれ、絶え入りける處へ、最上方金原嘉兵衛といふ十八歳の若武者落合ひて、上泉が首を取りたりける。甲の眞甲に、上泉主水佐金刺通治と金の象眼あり。生年三十四、惜まぬ者はなかりける。直江が軍勢、是より亂れ立ち、引色に見えけるを、大高六右衛門重綱佐州大高六右衛門伯父、紅のふけりの指物にて乗出し、上泉主水が組、大高六右衛門なり。組頭の先

途を見届け候と呼ばはり懸け、大勢の中へ切つて入り、終に討死したりける。直江が先手、なじかは怵ふべき。一度にどつと崩れけり。義光・政宗の軍兵共、勝に乗りて追ひ駆けしかば、直江が兵共、手負・死人相重り、屍は道路に充ちくたり。上杉勢・股江・大學・宇佐美父子・石坂興五郎・蓮池新七・赤輪土佐守・蓼沼日向守等、馬より下り立つて、立堪へ防ぎ戦ひて、除いて行く。敵、引付けば取つて返し突き卻け、七八度に及んで除き行く處に、上杉方に、二番組の大將五百川縫殿助、四千餘にて小高き所に備を立て、其勢、甚だ盛なりしかば、最上・伊達の軍兵共、是に恐れて、隠石といふ所より追出せず。蓼沼・宇佐美・若林・織部・前田慶次郎等、馬に打乗り、轡を並べて懸りけるを見て、最上勢は、長谷堂へ引入り、伊達勢は文田へぞ引取りける。上杉方石坂・前田・宇佐美父子・股江・赤輪等、鎧甲に立つ處の矢、七つ八つづつ折り懸けたり。鑓太刀の刃は、さくら筋の如く、乗りたる馬は、皆朱になり、各、討取る首、四方手に付けて、本陣指して引入りけるが、上泉が本陣の前を過ぐるとして、宇佐美・股江大音揚げて、各、は心強くも、大將主水をば、捨て殺され候者かな。なまけ情なく覺え候と匂りて通りける。上泉組は、一言の返答する者もなかりける。今日の合戦、最上方屈強の兵、二百九十七人討たれけり。

り。政宗が兵も、百十餘人討たれけり。景勝方にも、屈強の侍四百廿九人討死せり。手負は數を知らざりけり。其夜、杉原常陸介親憲は、ひた甲二百計りにて、長谷堂の城下に到りしが、先づ伏兵あらんと推量して、備を丈夫に立て、足輕を遣し、谷際をふませけるに、案の如く、七十餘人伏せたりけるを見出し、大方討取り、直に湖の堤へ押登りければ、堤の警固に、彼は廿人罷在りしを、残らず討取り、扱湖の堤を切りければ、水瀧鳴りて流れ出づる事、唯雷の聲の如し。二里の外へ聞えけるとかや。一旦に堰ぎたゝへたる湖なれば、一夜の内に干落ちて、元の谷とぞなりにける。杉原常陸介は、己が陣へ歸り、組頭・物奉行を呼んで、今日上泉主水、軽々しく働きして討死致す事、大將の器量に叶はず。縦ひ城州下知をせらるゝとも、何ぞ一騎にして、敵地へ乗込まんや。侍は終に國家の爲めに死すべし。唯徒に死する事、斯くの如くなれば益なし。唯死する所にて、明白に死するを第一とせり。扱今日、残り多く候ひしは、直江、物見を討たんと、城中より討つて出でたる時、直江、總軍を以て四方より攻め入らば、今日の中に、長谷堂の城を乗取らん事、手の内なりしに、山城守、心弱くて大利を得ざりし事、残念至極なりと、常陸は、後悔少からずぞ見えたりける。此時、杉原は、若

年より輝虎に奉公し、其性深沈寛厚にして、勇才人に勝れて武略あり。士卒の思ひつく事、又其類少なし。能き大將とぞ申しける。

會津より飛脚を遣し關ヶ原敗軍の由を

直江が陣に告ぐる事

昨日の合戦に、上泉主水を討たせ、直江、無念に思ひければ、新手の兵三千餘を進ませ、九月廿五日の辰の刻に、長谷堂の城の外構へ、取り懸けたり。昨日の合戦に、城中にも手負・死人多かりし上に、殊の外、戦ひ勞れしかば、三の丸の門を打つて出づる者なし。唯鐵炮を打出し、城を取られじと防ぎけり。直江が軍兵共、急に總構へ攻め入りて、矢倉に火を懸けたり。兼ねて長谷堂の城、難儀に及ばず、狼烟を揚ぐべき間、谷の城・寒河江の城より、助け來るべき旨、約束したりけるが、其放火の烟を、件の相圖かと心得、谷寒河江の兩城より、新手の兵三千餘、長谷堂の城へ懸け著けたり。直江が先手、是に驚いて、少し引退かんとせし處を、城中より志村・小林・日野・鮭延の兵共、三方の木戸を開いて、討つて出でたりける。杉原常陸介親

憲八百餘騎、横合に突き懸り、最上陣へ鍵を入れ、追つ返しつ、火花を散らし、三度迄戦ひける故に、最上勢突立てられ、城を指して引き退く。杉原常陸、手鍵引提げ、馬を踏放し、眞先に進みければ、溝口左馬助・五百川縫殿助、逞兵を引勝つて二千餘、鐵炮を打立て、わき道を廻つて、谷寒河江の敵の跡を取切つて、弓・鐵炮を揃へ、散々に射る。政宗が陣より、之を見て、與倉紀伊守・保土原江南・大條薩摩守・新館肥前守三千餘にて、谷寒河江の最上勢を助けんとて、馬煙を立て馳來る。直江山城守、旗本七千餘にて押出し、高き處に備を立て、種子島大筒を集めて、打立てければ、政宗勢は引退く。上杉方尻高左京三股九兵衛・平林内藏助・石口主馬寺島六藏等百騎計り、谷寒河江の陣へ切つて入りしかば、一たまりもなく、崩れ立ち、山へ懸りて、谷境へ引入りけり。上杉勢追駈け、能き首七十餘討止めける。今日より同廿八日迄、四日の間に、直江、日々に兵を出して、義光・政宗と合戦す。毎日の軍、上杉方、毎度打勝ちしかば、勢を振はずといふ事なし。既に廿八日には、東根の城を乗取らんと、直江支度せし處に、其日の午の刻に、陣中に雜説ありけるは、此月十五日、美濃の國關ヶ原表の合戦は、東國打勝ち給ふ故、治部を始め、西國方の諸勢悉く敗軍し、三成・小西生捕られたる由申出せり。

誰いふともなかりしかば、如何成事をかいふやらんと、分明ならざる處に、申の刻に、會津景勝より飛脚來り、關ヶ原口上方衆打負け、御所、近々會津へ取懸けらるゝの旨、其告あり。早其表を引拂ひ、會津へ引取るべき旨、註進ありければ、直江が諸軍、之を聞いて、皆肝魂を失ひ、色を變じ力を落さずといふ者なし。最上方政宗方には、天晴潤色やと、悦び勇まぬ者はなかりけり。

直江山城守井上杉の諸軍勢長谷堂口を引拂ふ事

附洲川合戦の事

さる程に、關ヶ原合戦、味方討負くるに付き、早々最上口を引拂ひ、會津へ歸陣仕るべき旨、景勝より飛脚到來しければ、此表、陣拂すべきにぞ極まりける。直江・杉原は、諸大將を召集め評定しけるは、今度松本木工之助・穗村造酒允・上泉主水以下頭分、多く討死すると雖も、毎日の合戦、味方勝利を得ずといふ事なし。先日、幡屋の城を攻め落せしより以來、攻むれば、必ず取り、戦へば必ず勝つ。近日、長谷堂の城を攻め落し、山形・東根の兩城を乗取らんと思

ふ處に、關ヶ原口に合戦、味方敗軍の註進あり。然る上は、是非を論ずるに及ばず。但し、此儘引取る則とぎんば、敵方にて必ずいはんは、景勝が侍共、聞逃を致したりと、是末代迄の恥辱なり。明日諸軍を押し出し、長谷堂の城を力攻ちからせめにして、勇氣を城中に示し、武威を輝して、歸陣すべし。各も一際、精を出し給へと申しければ、何れも心得候とぞ同じける。されば引口の道を作り、總軍を易々と引取るべしとて、友町大膳・竹田金八・善場入道に、人夫二千引添へて遣しけるを、城中より、寄手引取ると心得、二千計りにて討つて出でければ、上杉方友町・竹田等も、返し合するを、直江方より敵不意に來り候間、早々引取るべしと、使を遣しける。友町申し候は、見懸け候敵を捨てゝは、除き難く候間、爰にて討死仕るべしと、返事して立ち堪へければ、直江も、月岡八右衛門に六百餘差添へ、加勢に助け來るを見て、長谷堂の城の勢も、叶はじと思ひけん。城へ引取りけり。直江は、劔持市兵衛・森山舍人を使として、長谷堂の城中へ申遣しけるは、今度大亂の根本は、秀吉公薨去なされ、秀頼公御幼稚にて、天下治まり兼ね申す故、忠義の諸大名、太閤様御厚恩報謝の爲め、此度の信義を思ひ立ち候へども、天運時至らざるか。忠臣義士、多く頭を戦場におとし、謀首健將、擒となる事、是前世の宿報

なり。之により、我々も明日、此表を陣拂ひ致し、會津へ歸陣仕り候。御暇乞の爲め、一戦仕り度候へども、今日は日も暮れ候間、明朝一戦仕るべき旨、申遣しぬ。最上方も、上杉衆明日御歸陣の由、仰越さるゝ旨、其意を得申し候。明朝餞別に一鎧仕るべく候と、返事したりけり。明くれば、九月廿九日の早天に、直江兼續、四萬の勢を二手に分け、二萬は菅澤山に残し、政宗を壓へ、又二萬を引率し、急に長谷堂の城へ取懸け、總構を焼き立てける時、上杉方山口軍兵衛、黒段の母衣を掛け、一番乗と名乗つて、堀へ上り飛び入りければ、友町大膳・篠塚伊賀守・大股彦兵衛十人計り續いて、込み入りける。直江兼續は、大旗の下に、馬を立て、只平攻に攻めよとなれば、上杉の軍兵共、我れ先にと亂れ入りける。之に依つて城中志村・鮭延以下、總構を持ち泳へず、二三の丸へ引籠り、石弓・大筒を放し懸け、爰を最期と防ぎけり。景勝勢は、外構を踏破り、甲附の首百六十餘討取つて、風上に火を懸けたり。折節、山風烈しく、外構は申すに及ばず、侍の屋形々々町屋に至る迄、大方焼き拂ひ、當るを幸に斬捨て、勝鬨を揚げて、又菅澤山へ引取りけり。長谷堂城中にも、城内を拂つて出で、追討たんと支度なり。最上義光・其子家親も、政宗と一所になり、上杉勢の陣口を討留めんとぞ謀り

ける。殊更義光は、先手へ加り進まれけり。さる程に、直江四萬餘にて、菅澤山を下つて、

出村宇内跡に残る

數百箇所の小屋に火を懸け、諸手段々に次第を守りて、洲川を右になし、引いて行

く。義光・政宗、三萬餘にて追駈けたりしが、洲川の北半里計りにて指倉八幡林邊、直江が引口に追

著きけり。最上方谷地・森伯耆・川能讚岐・小國大膳等、真先に進みける。直江は事ともせず南

へ指して引取りければ、義光大きに怒り、是敵人、我を蔑如にする處なり。追討にして、手並

みを見せよと、鬨を作りて追ひ駈けたり。杉原常陸介親憲・溝口左馬助勝路・種子島八百挺を

立て、後殿となり、段々に立引にしたりける。こめかへ込替々々打立つて、敵ひためば引取りけり。

直江山城守兼續は、革包鎧に、馬蘭の甲を著し、山鳥の羽の纒をかけ、黒栗毛馬の尾髪、飽く

迄ちとれたるに、十文字の鎧平首に引添へ、馬に白泡はませ、後陣に引き下知しけるが、最上

勢も、杉原・溝口が種子島に打立てられ、度々しらむを見て、精兵八千にて取つて返し、最上

伊達が陣へ切り懸り、二揉・三揉揉みけるが、終に打勝つて、最上勢も伊達勢も、五町餘追返

し、首二百餘討取つて、又引返し除き行きける。然れども、後陣多く馳せ加はりしかば、最

上・伊達が軍兵共、亦進み駈けてぞ來りける。上杉方井狩・立蕃・允重満と、最上方湯淺甚内と

戦ひて、宮内を討取る。最上方には、大門圖書真先懸け高名するを見て、常に先を争ひける川副左門、無念に思ひ、乗込みて討死す。直江は、返合せて、戦ひては引退き、追返しては引除きける處に、最上の侍大將天堂彌七郎、二千餘にて透間もなく、直江を附け來りけるを、上杉の侍大將二本松右京進周次此時十手勢百騎計りにて返し合せ、火花を散らして戦ひけるが、遂に打勝つて、天堂彌七郎を討取り、首を討ち留めたり。最上義光、之を怒つて、旗本を以て突處け、二本松が手切崩し、逃ぐるを追うて進まれける。二本松が敗軍にて、直江が陣、色めきけるを見て、義光、政宗、諸軍を一日に進めて、攻め立てたり。上杉方備の足亂れ立ち、春日右衛門、五百川縫殿助が備、どつと崩れけるが、縫殿助、手廻三百計りにて取つて返し、堤の上に備へつゝ、敗軍を集めけり。縫殿助、手自から旗幟を取つて、之を堤の下に立て、一寸も引くべからずと囃りて、士卒を勵し下知をなす。最上伊達の軍兵共、此堤を取らんと、攻め懸りけるを、五百川、自ら之を争ひ、防ぎ戦ふ事甚し。最上勢も、少々引退きける處へ、上杉方七寸五分つはた監物、友町大膳、神保隱岐守後保科肥後守正之に奉公す、夏目軍八等百騎計り、五百川を助け來り、弓、鐵炮にて、散々に射立て打立てしければ、最上伊達の兩勢も、手負、死人多かりける。

る。兩方互に人數を加へ、打合ひける程に、今朝辰の刻より、未の刻に至る迄、互に討つつ討たれつして、物離れする事を得ず、合戦時をぞ移しける。直江兼續、大いに怒り、早く人數を引取れと、度々申遣しけれ共、兩軍喰留めて、別る、事叶ひ難し。色々下知しけれども、直江が後殿の軍兵共、此方除口のきぐちを、敵より討たんと仕り候氣色、さながら顯れ見え候間、物離れなり難く、心ならず睨合ひ候といふ。直江怒に堪へ難くして、我れ大將となる上は、敗軍に及ば、死を以て國恩を報ゆべし。しかも我れ、國の大臣として、苟くも人手に懸るべからず。腹を切らんとするを、前田慶次郎利太、直江を礎と白眼み、御身の宣ふ處、一つも宜しからず。凡そ士卒は、大將一人を頼み候處に、若し大將、心弱くして、方寸の心違ひ候ては、士卒は、何となり申すべく候ぞや。大將は、遠きを見て近きを顧みず、大を料つて小に屈せざるを第一とす。若し小勝に誇り、小敗に氣を失はば、自身に負を招くなり。何の功をか立て申すべき。此上は、爰をば我に任せ給へ。後手へ馳せ加り、下知仕り引揚ぐべしとて、唯一騎取つて返し、芋川或は五百川が後殿の手へ馳加はる。宇佐美民部も、慶次郎に續いて返し來る軍奉行の杉原常陸介、始より後殿の備にありしが、慶次郎が來るを見て、大音揚げ、敵待

懸け候に、下立つてかけられ候へといふ。慶次郎、馬より飛んで下り、手鎧取り進みける。水野藤兵衛・葦塚理右衛門・藤田森右衛門・宇佐美彌五左衛門後に越前少將殿に奉公す四人、ばら／＼と下り立ち、鎧追取りて進みける。政宗・義光下知して、差詰め引詰め、弓・鐵炮を放しかゝると雖も、事ともせず、慶次郎・宇佐美・葦塚・藤田・水野五人、一度に鎧を合せ、散々に戦ひて、鎧下に七八人突き伏せしかば、さしもの最上勢、突き立てられ、二町餘こそ引取りけれ。宇佐美民部計りは、馬にて右の堤を乗り込みけるに、金子次郎右衛門・沼掃部乗付け、三騎連れて政宗手へ乗込み、弓手・馬手に相請け、四五騎斬り落しける處へ、杉原常陸介、種子島二百挺にて、高見に折敷き、敵の先手へは構はず、義光・政宗の旗本を目當に、雨の降る如くぞ打立てける。最上・伊達の本陣、手負・死人見る内に重りつゝ、過半裏崩れして見えしかば、すはや、此間に引上げよとて、上杉の諸軍、之をも亂さずして、五町計りぞ引取りける。然れども、最上勢は、前田慶次郎・葦塚理右衛門・水野藤兵衛・宇佐美彌五左衛門五人の鎧〔脱アラン〕に、突き立てられしにや恐れけん。最早突かざりけり。此口の手柄、大將には杉原常陸介・溝口左馬助、又侍には、慶次郎・葦塚等五人にぞ極りたりと、諸人も之を感じける。斯くて、上杉の諸軍、洲川に沿うて、

東を指して十町餘引きける處に、政宗、精兵八千を左右に隨へ、眞黒になつてぞ進み來りける。上杉の小荷駄・雜人共、直江が前を押しけるが、之を顧みて、色めき渡り崩れんとせしを見て、政宗、歩者をば跡にさげ、馬武者計りにて、急に追ひ詰め來りければ、上杉の軍、小荷駄に押し立てられ崩れける。政宗、勝に乗りて、追駈け來りけると、溝口左馬助、天つきの指物にて、取つて返し、小川の橋詰に下り立つて、目を瞑らかし、鎧を伏せて、我は是れ、景勝が侍に、溝口左馬助といふ者なり。一鎧參らんといふ儘に、政宗が先駈の兵共と鎧を合せ、三人突倒しけるに、二人は川へ倒れ入り、一人は橋の上にて突伏せ、鎧下に首を討ち取つて差上げたり。溝口が勢、傍あたりにを拂つて見えける故、政宗の兵も、二十間計り引退いて泳へたり。上杉方鹿沼右衛門、神山助右衛門と山陰へ、馬を乗上げ、旗を物深く立てしかば、最上方も是に白みて追止まる處に、石坂與五郎一人駈付け、溝口に立並びける。宇佐美彌五左衛門・葦塚理右衛門・前田慶次郎も駈著け、小川を隔て、泳へけり。宇佐美藤三郎も、五百川が手にて高名して、薄手一箇所負ひしが、首を提げ、父民部を尋ねて來りしを、溝口見て、高名は何れも見たり。敵多勢なり。首を捨て此處を固めよと申しければ、首をば下人に渡し、溝口と一

所に橋詰に怵へける。最上衆も、政宗勢も、上杉の兵共の勇力剛勢に摧かれ、是よりは追ひさり、直江兼續は、遙々と之を顧みて、手自から鍵追取り、六千餘にて山道を傳ひ、伊達・最上の兩陣の左脇を、後へ廻るとぞ見えし。最上伊達の勢、色めくを見て、鬨を揚げてぞ懸りける。義光・政宗も、數十度の戦に草臥れしかば、直江に切立てられ、洲川へ追浸され、討たる者數を知らず。我もくと、長谷堂指して逃げたりける。上杉勢も、今は是迄なりとて、悉く引退く。既に日も、西山に傾きければ、溝口左馬助、直江に向つて、夜に入りて人數を引取り候は、大敗軍になるべく候。今夜は、堅固の地に陣を取り、明朝、引取り給へと申しければ、直江も、尤もと同じ、一里計りも引取つて、小高き所に野山あり。半道計り行く先は大山なり。爰こそよき所なれとて、陣を取り、夜の明くるをぞ待ちたりける。溝口左馬助事、鐵炮三つ中り、鍵疵八箇所ありける故、其夜、野陣にて死したりける。惜しき事なりと、諸人涙を流しけり。今日卯の刻より、申の刻に至る迄、十八度の戦に、上杉方十一度迄切勝ちければ、只鬼神とぞ沙汰しける。今夜の陣取、直江下知にて、山より半道前に陣取り、山へかゝらざる事を、將軍様にも、後々迄御稱美なされけるとかや。今日伊達・最上の兵共の首千廿

三、上杉方へ討取りける。景勝方も、千人の上討たれけり。直江は、其夜は野陣を取り、明くれば十月朔日の卯の刻に、野陣より見渡せば、最上・政宗の人數、半道計りに控へたり。直江は諸大將と備を立て、最上伊達が陣へ向ひ、謙信家の軍法、かゝり引といふ術にて、引取りしかば、義光・政宗も、直江にはかられて、追はざりければ、上杉の諸軍、恙なく翌日の晩には、米澤へぞ引取りける。直江が組下次右衛門は、三百餘にて庄内を廻り、山形の西境村に陣取り、直江とは陣を隔て、居たりけり。直江勢も、歸陣せるを知らずして、陣取りけるが、上杉勢の引取りたるを聞き、下勘七・同美作守・原八左衛門・井上牛之助以下、死狂に合戦せんと、支度しけるを、最上義光より、さまざま和談を入れられければ、心ならず、最上に降参してぞ出でにける。上杉家には、いひ甲斐なしとぞ嘲りける。酒田の城には、上杉より志田修理・川村兵藏を籠め置きけるを、最上より義光の三男清水大藏と、楯岡甲斐守を大將にて、五千餘にて、月山へ懸り押寄せ、酒田の城を取圍み攻め戦ふ。城中には、志田・川村防ぎ戦ひけれども、小勢故叶はずして、城を開き渡し、會津へぞ引取りける。

伊達政宗福島之城を攻むる事

上杉勢、最上より引取りしかば、政宗は、最上より歸足に、上杉領福島之城を取らんと志し、片倉小十郎・茂庭兵藏に向つて、此度、上杉勢、數を盡して、最上へ押向ひ、過半手負ひ、又は討死すれば、福島之城、築川の城には、さのみ人數は、あるまじければ、此透間に攻め取らんと相談し、十月六日の晩方、福島之城へ志し、瀬の上よりぞ寄せたりける。此城には、本庄越前守繁長在城せり。此繁長は、謙信一門にて、越後本庄の城主たり。永祿十一年に、謙信の氣に違ひ、本庄の城へ楯籠る。謙信も、年々出馬しけれども、天正元年迄、六箇年の間、輝虎と楯つき、遂に攻め落されざる剛の兵なり。天正元年の春降參し、上杉家にて股肱の大將たり。さる頃、繁長一身にて、最上義光と取合ひ、遂に義光に切勝ち、庄内十萬石切取りたる程の者なれば、奥北國にて、其名高し。景勝、會津へ移り候へば、福島之城に差置かれたり。之に依り、政宗をも、物の數とも思はざりければ、嫡子出羽守勝長・岡野庄内・栗生美濃に、二千餘を附け、切つて出でたりしかば、政宗、一怵もせず、城下を引取り、雀原に陣取り、日々に物

見を出し、互に矢軍に日を送りける。十月八日の早天に、上杉方永井善左衛門後江戸御直參紀州海野兵左衛門の婿小瀬美作守、物見に出でけるが、永井が廻りける方に、菖蒲生えあり。此前を乗り通りける時、政宗より差置きける伏兵六人起りて、永井を取巻き討たんとしける。永井、元より大方の剛の者なりければ、六人の内四人討ち取り、甲首を、鞍の鹽手緒留取付に附けてぞ歸りけるに、二人の伏兵逃げ歸り、上杉方には、鬼神が候とぞ恐れける。政宗は、本庄が勇猛、其手の兵共の物馴れたる體を見て、始めて恐るゝ色ありて、申しけるは、次第に雪深くなるべし。寒氣の淺き内に引取るべしとて、勢を打入れけり。繁長は、嫡子出羽守を、福島之留守に置き、自ら七千餘を率して、政宗の跡を慕ひ、小須五迄討つて出で、少々、焼働きして引き入りけり。政宗は、白石の城に、十日計り罷在りしが、思へば無念にやありけん。夜通しに、人數を出し、上杉領長井郡湯原へぞ攻め入りける。折節、上杉方甘糟備後も、岩井備中守三千餘にて、長井郡を打廻りけるが、十月十五日の辰の刻に、湯原にて、政宗と出合頭に、はたと行逢ひたり。折節、霧深くして、一間二間の内も見えざりければ、甘糟、大に悦びて是天の與あたへなり。政宗を討たんと、眞先に進みける。政宗、運や強かりけん。物見の者馳せ歸り、

上杉の大軍押來り候と、告げたりければ、政宗も馬を控へける處に、又物見馳せ歸り、景勝直の出馬にて候。紺地に日の丸の大四半、一里計りに見え候といふや否や、景勝出馬ならば、多勢なるべし。少し引取つて、要害に待てといふ程こそありけれ。引取らんとせし處へ、甘糟備後守、眞先に喚いて駈け入りしかば、政宗が八十餘押立てられ、渡ら瀬所の名なりさして引退く。甘糟備後守、勝に乗つて、追討に能き首二百餘討取りける。然る内に、景勝も二萬計りにて、境目打廻に出でられけるが、政宗、此表へ罷出でたりと聞き、討止めんと、馬を早めて、湯原へ著き給ひけれども、政宗、既に引入りければ、殘多き事なりと、景勝、後悔し給ひけり。斯くて、十月も末になり、次第に寒氣イ陰寒甚しく、雨雪降り續きければ、景勝も犀川瀬の上迄廻り、會津へ引取りけり。

關ヶ原敗軍の前、八月廿二日、岐阜の城を攻めんとて、東國勢、雲霞の如く川岸にぞ押寄せたり。岐阜の城主織田秀信は、早朝より手勢千七百餘引率して、川手村の閻魔堂に屯し、斥候を出して、下知をぞせられける。同國上有知の城主佐藤才次郎・木造左衛門百々越前飯沼十左衛門・齋藤齋宮に、三成が加勢河瀬左馬助等は、新加納村と大野の間に控へて、待懸けた

り。時に、越前下知しけるは、東國の武士共は、元來馬上達者なれば、河岸より三町控へて、行馬を結び、出入口を付けて、千人の足輕を、四百人勝つて、行馬の前へ備へ置き、内に大筒を仕懸け、六百人は河端に進んで、繰替に立つて、敵、河へ乗入らば、半分渡ると見し時に、込替へく打立てよ。敵、陸に乗り上らば、行馬の際に引取つて、さつと懸りて、河へ追込み討取るべしと、五十騎の二備を、河の上下番方の村の小蔭に伏せ置きて、差挟んで駈出すべし。敵、散らすとも、其儘に旗本へ集るべしといふ處に、東國の軍勢、河を渡し、既に半ば渡る時、待懸けたりし鐵炮、俄に時雨の降る如く、打立てければ、之に中りて、寄手彌々上に重り、手負・死人は數を知らず、流るゝ血は、紅葉散り浮く龍田川に異ならず。然れ共東國武士の習、死を厭はぬ素姓にて、流るゝ骸を足溜にして、我もくゝと進みけり。其中に、監物は近邊の黒田にあつて、常々、川の淺深を、能く知りたる驗にや、木曾川の逆浪を、ちつとも恐るる氣色もなく、渡れや者共とて、其馬を乗入れし形勢は、古の四郎高綱にも異ならず。是より池田・淺野・堀尾等、相續いて馬を馳込めば、秀信の兵卒、之を防がんと、打連る鐵炮をば、物の數とも思はゞこそ。一度にとつと向の岸に乗上れば、岐阜勢、如何なる術にや。一町程退い

て、火花を散らし戦ひけり。時に、堀尾信濃守が兵士に、堤五郎兵衛、一柳が家臣大塚權太夫、眞先に進んで、一番に鎧をぞ合せける。堤は岐阜方の前田半右衛門と、暫く戦ひしが、遂に前田に討たれけり。大塚は、武市善兵衛と渡り合ひ、火出づる程打合ひしが、武市突伏せられ、既に危く見ゆる處へ、武市忠左衛門駈著けて、救はんとせしかども、善兵衛が運命や極まりけん。大塚に首をば取られけり。扱岐阜方の侍大將飯沼勘平は、緋緘の鎧に、赤母衣を掛け、白茸毛の五寸餘の馬に乗り、四角八方をにらみ廻りて、天晴、敵もがたと窺ふ處に、大塚權太夫、善兵衛が首を取つて、引退く處を見て、其首返せといふ儘に、馬を乗放し、鎧追取つて追懸ければ、飛行く夜叉神の荒れ渡るも、斯くやあらんと、血氣の勇者にぞ見えにける。一柳、之を見て、あれ討たすなと下知すれば、五騎押並んで突き来る。岐阜方よりも、續けやとて、前田半右衛門・藤田權右衛門かけ塞がり相戦ひ、頓て、大塚を突伏せければ、勘平、押懸けて首をば取りたりける。秀信の旗本へ、持參せよとて、坪井七兵衛に渡し、馬に乗らんとせしかども、つけすまひしに乘得ざりし處に、あたりを見れば、小高き岡に、好き武者あり。馬、物具の美々しさ、武者振のけだかさ、大將と見えければ、一鎧といふ儘に、飯沼と名乗

りかけて進みしが、東軍の一將池田備中守なり。少しも臆せずして、つゝと馬を歩ませ進む處に、池田の兵に、伊藤與兵衛といふ者、駈入つて押隔てけるを、輝政見て、其所を去れと怒られければ、與兵衛、是非なく立除けば、早や鎧を合せ、龍吟すれば虎嘯く勢をなし、風雲一百八盤榮の分野にて、兩方盛の若武者、殊に聞ゆる手利にて、暫く勝負はなかりしが、何とかしたりけん。勘平、突かれて倒るゝ處を、備中守、馬より飛んで下り、首を取らんとせしを、勘平、がばと起上り、むすと組んで齒嚙をして、剛力を出すも、手負武者の悲しさは、備中守に組伏せられ、遂に首をぞ取られける。刀は伊藤與兵衛に、己、取れとて取らせけり。次で堀尾が郎等畑田民部・津田四郎左衛門等、思ふ程戦ひて、終に討死をぞしたりける。又岐阜方にも、名を得たる前田藤田、諸共に轡を並べて切廻り、此處を支へ、彼處を防ぎしが、皆枕を並べ討死せり。爰に於て、百々越前は、木造を招寄せて、某が手勢二千餘人、其内に手負一人生残りて、皆々討死したる體なり。御邊は、未だ深手も負はず、手勢も過半残り見ゆ。味方、逆も負軍になれば、敗軍せざる其先に、急ぎ岐阜へ立歸り、町口を固め給へ。此表の合戦は、命限に戦ひて、叶はずんば、跡よりして引取るべし。急ぎ候へとありければ、木造聞き

て、其方の指圖に任せて、唯今の難儀を見捨て、引返さば、虎口をはづしたる杯と、今の嘲、後の恥、思ひ當らすといひ放つを、百々、重ねていふ様は、逆も遁れぬ虎口なり。明日の合戦に、其理は立つべきぞ。なれば是非に引取り候へ。且は忠ともなるべきぞ。はや疾々と諫むれば、木造、げにもと得心して、手勢を集め引取れば、味方の軍兵、此内談は知らず、只敗軍と思へば、駒の足も、しどろになりて、騒ぎ色めきける氣色を、敵方より見て、東國武者に、武藤掃部・津田新十郎・澤井左衛門・平井彌次右衛門・同兵右衛門・武藤清兵衛・吾孫子善十郎・生駒隼人・安井將監・吉田平内・八島吉十郎・稻熊市左衛門・森勘解由・林藤十郎・小坂助六・堀田小三郎等、皆粉骨の働して、名を萬天に揚げ、譽を後代にぞ残しける。爰に、池田輝政は、河上を乘渡り、岐阜方の旗の手の揺ぐを見て、備を崩し横合に截つてぞ懸りける。一柳淺野有馬山内、塵を取つて突懸れば、岐阜方の軍兵、爰を先途と防ぎしが、終には一度に敗軍す。其中に佐藤才次郎と聞えしは、信部の庄司が末流にて、名に負ふ勇士の時めきしも、一番に敗走す。流石に、百々、飯沼・津田は、少しも騒がず、後殿して引退くこそゆゝしけれ。時に、佐々彌三郎、加納表より川手村へ駈懸り、秀信に申す様、急ぎ御引取然るべしとて、御馬の口を引返せば、

ば、寄手の軍兵、勝に乗つて追駈けたり。津田藤右衛門、唯一騎、ちつとも騒がず踏止まる。同藤三郎・堀場茂兵衛返し合せて、競ひて來る敵兵を、突捨て、引退く。道の左右は深田にて、心は彌、猛に進めども、寄手も更に進み得ずして、すべき様あらざりける處に、堀尾軍兵に、野々口彦助十六歳堀場に碯はたと渡り合ひ、鎧を捨て戦ひしが、堀場が馬の平首に、野々口が太刀の切先當りつゝ、馬、頻に跳ねければ、堀場たまらず、深田の中へ、眞逆様に落ちけるを、野野口、續いて馬より飛下り、刺透し頓て首を取りにけり。味方の軍兵、之を見て、野々口を討たすなど、聲々に呼ばはれば、野々口は、相續く勢と共に、しづくと引取りけり。尙寄手の軍兵進む處に、上加納村の前にて、瀧川平六・中島傳左衛門、其外、岐阜方の兵共、取つて返し、足輕を立直し、鐵炮入替へ、打たすれば、寄手も、さては進み得ず。瀧川、高名を致すと雖も、殘黨全からざれば、大勢に攻め立てられ、四方八面に落行きけり。日も漸く傾けば、寄手も、新田の橋より引返して、芋島・新加納邊に、陣取つて篝を焚き、夜討の用心嚴しく、長の夜を明す。扱中納言秀信は、今日河越の合戦に、打負けたりしを無念に思ひ、夜に入つて組頭を召集め、餘りといへば、今日の合戦、無下に敗軍せし事、無念類なしと雖も、時の不幸、

是非もなし。明日の合戦は、一際頼入るの間、各、城を枕として、討死をすべき由、組下の兵卒へ、睨と相觸れられ候へとありければ、木造承り、畏入り候。今朝新加納へ向ひ候兵共、過半は討死仕り、又新參の輩は、直に落失せ候も數多にて、十騎組は三四騎になりければ、危き籠城にて御座候。さりながら、此城、東と南は、谷深く其狭間は深田にて、馬の蹄も立ち難し。左右の峯は峨々と聳え、松柏生茂りて陰闇く、北の方は、長良川切岸、尤も絶壁なれば、此三方は、常だにも人馬の通路もなり難し。まして六具を固めし身は、天狗ならば、いざ知らず。攻め入るべき地にあらず。西の方は、七曲・追手・搦手三筋の道嶮阻なり。其上、つまりつまり難所にて、身命を惜まず防ぎなば、唐の韓信・樊噲もたやすく攻入り難く、要害の籠城に候へば、皆々必死の働仕り、三日持固むる程ならば、御利運は掌の中に候と、手に取る様に、演説してぞ退きける。斯くて、東軍の寄手、其日おとし起の渡は、福島正則・田中兵部大輔長正・同民部長顯・加藤左馬助嘉明・京極修理亮高知・藤堂佐渡守高虎・生駒讚岐守正俊・寺澤志摩守廣尙・蜂須賀長門守至鎮・黒田甲斐守長政・井伊兵部少輔直政・本多中務大輔忠勝・同美濃守忠政等、萩原を渡り、西美濃に到り、所々より船筏を集めて、總軍勢是に乗り、起を渡り、近邊の

在々所々を放火して在陣す。然る處に、北の方には、合戦最中なりとの註進ありけるを、當手の諸將聞きて、甚だ怒り齒嚙をすと雖も、更に益ぞなき。之に依つて、各、福島の陣所に會合して、屢、評議を費すと雖も、げにもと思ふ沙汰もなし。時に加藤左馬助嘉明、膝直し申さるゝは、各、の御評議は、偏に岐阜を乗取らんと、一途になづみ給ふ故、衆議、更に決し難し。先づ子丑の方へ出張して、尤も岐阜を窺ふべし。若し北の方の軍士共、先ずるに於ては、岐阜を其儘打捨て、大垣の城を攻めらるべきは、如何あらんとあれば、諸將、げにもと一同せられけり。

本庄出羽守宮代合戦の事

慶長五年も暮れ、同六年正月になりしかば、會津にては、専ら合戦の用意して、寄せ給ふを待ちたりけり。去年九月十五日、關ヶ原合戦に、東國討勝ち給ひ、天下皆、御掌握に入り、御味方の諸大名、國替・新知行・加増領給はり、京・大坂は賑ひけり。三成一味の大名は、或は討たれ、又は生捕られ、流罪・死罪様々なり。罪科の重きも輕きも、關ヶ原口御勝と聞きては、皆々

降參せられけるに、上杉景勝計りは、會津に楯籠り、最後のひとと合戦、願やかに仕り、討死せんとて、一言の儀を申入れられず、矢尻を磨き待懸けたり。伊達政宗は、去年最上口にて、數度、直江に打負け、其後、湯原口にて、甘糟備後守に打負けられければ、之を口惜しく思ひ、慶長六年二月初に、岩手澤を立ち、同七日に、伊達郡へ取懸けて、方々燒働き、其烟先、福島之城へ見えければ、本庄繁長は、嫡子出羽守滿長を大將にて、六千餘を差向けたり。出羽守は、福島之城を出て、打廻りけり。〔爰に〕宮代といふ所に砦を構へ、築井圖書に二百計りにて差置きけるを、政宗の先勢取懸りけり。折節、宇佐美式部小瀬美作は、五十騎にて大物見に出でけるが、之を見て、近所に森のあるをかたどり、備を立て鐵炮を打懸けけり。政宗の先手之を見て、多勢かと疑ひて、懸り兼ねる處を、宇佐美・小瀬下知して、鐵炮をつるべかけ、喚いでこそは懸りけれ。政宗の先手桑折伊豆守三百餘、川端へ引退く。宇佐美・小瀬追駈けて、能き首十一取り、其勢に、宮代の砦へ引入りしかば、圖書も力を得、持固めける處へ、福島より本庄出羽守、六千餘にて討つて出でたり。本庄が先手、（そのい）外池甚五左衛門・小田切所左衛門・布施次郎右衛門二千計りにて、打廻りける處を、政宗の先手郡左（衛）門・伊達上野介四千餘追

駈け、之を討たんとす。外池・小田切取つて返し、會釋もなく切つて懸り、十騎計り切つて落しけるに依り、政宗の先手押立てられ、四町計りを崩れたる。外池以下の上杉勢、勝に乗つて追駈けたり。政宗が二の先石川大和守昭光・片倉小十郎景綱三千餘にて、上杉勢を押返し、合戦を始むる時、柴田小平次・守屋伊豆守・鹿股喜右衛門・茂庭兵藏、真先に鎧を入れ、喚き叫んで突立てければ、上杉勢まくり立てられ、三町計り崩れけり。上杉方栗生美濃守・唐人丹後守・江波五郎・岡野左門等、千餘にて駈著ければ、宮代の砦より小瀬美作、横合に突いて出でたりける。互に鎧先を打合せ、押しつ押しされつ戦ひて、石川・片倉を、二町計り追立てける處へ、杉原常陸介親憲八百計り、左より廻り、政宗の旗本を目がけ、跡へ廻して、本庄出羽守二千餘、右の方より真黒になつてぞ懸りける。上杉の家風にて、長柄は竹柄なり。何れも錫杖持にして、えいや聲を出して押來る。大將本庄出羽守、馬より飛下り、手鎧引提げて、士卒に二十間計り先立つて懸りける。銀の大夫衝の立物を見て、政宗方には、本庄繁長なるぞ。備を厚くして、破るゝなと犇きける處に、〔宗イ〕澤根刑部・瀧上舍人・中村但馬守・三崎出羽守を乗越して、政宗の陣へ駈入りけり。政宗の勢、弓・鐵炮を揃へ、打立つる事甚だ烈しかりけるに、

本庄出羽守、眼を瞋らし大音揚げて鎧を入れしかば、皆々續いて、鎧を入れたりける。政宗旗本、少時は戦ひけるが、遂に押立てられ、十町餘、足を亂して崩れけり。伊達阿波守・羽根田因幡、五千餘にて政宗を助けて馳來る處に、上杉方杉原常陸介、糸だての指物にて、八百餘を左右に従へ、伊達羽根田が勢の真中へ、面もふらず駆入りければ、阿波守・因幡守も、一度にどつと崩れけり。政宗の軍兵共、川へ逃入り死する者多かりけり。本庄・杉原勝に乗つて、追討に首二百計り討取りけり。一里計りを隔て、政宗の後陣一萬計り、備を立て遙に見えければ、本庄も人數を纏ひ、福島へぞ歸りける。政宗、去年より度々の働に、大方上杉に打負けしに、能く思ふに、去年、大君より中澤主税を御使者にて、必ず景勝と戦ふべからずと、固く制し給ふも、政宗武勇のたけにては、上杉との勝負は、逆も叶ふまじとの御賢察ありし故なり。誠に明君の未來を鑑み給ふ事は、鏡に寫すが如し。世以て、御了智を感じ奉りけるとかや。

政宗信夫郡燒働 井木幡四郎右衛門討死

附 須田大炊助長義政宗と逢隈川合戦の事

政宗は、度々の敗軍にも恐れず、三月廿四日、二萬餘の勢を率して、白河の城一説に福島なるべしとありに著陣し、一日人馬の足を休め、廿七日に信夫郡へ働き、在々所々放火し、民百姓共、當るを幸に斬棄て、飯坂の佐藤庄司が古屋敷に、陣をぞ取りたりける。其夜、伊達實光が子兵部大輔成實政宗伯父一説に従弟 政宗に向つて、去年白石の城を攻め取ると雖も、登坂式部が回忠なれば、伊達の家の手柄にはあらず。其後、數度の戦、毎度景勝に仕負け候事、誠に當家の瑕瑾なり。關東にも、斯様の儀を思召しけるにや。當家と上杉との弓矢を、御制禁ありける。誠に心憂く覺え候といひければ、原田左馬助・白石若狭も、成實の御申の通なりと答へける處に、木幡四郎右衛門進み出で、我等、存じ寄る行候間、明日福島へ働き、其虚實を窺ひて、御左右申上ぐべしと申しければ、尤もとぞ同せられけり。明くれば、三月廿八日未明に、木幡四郎右衛門、手勢百騎にて、福島の城近く押寄せたり。本庄繁長父子は、城の高櫓に上りて之を見る。岡野左内は、大手口の門櫓にありけるが、士卒に下知して曰く、今朝、政宗方の大物見は、心に一戦を持ちたり。其仔細は、先手は騎馬廿騎見えたり。其次三町計りに、又五十騎計り控へたり。其次、亦五町計りに、後勢控へたり。是我を誘く行なり。卒爾に討つて出づべか

らずとぞ制しける。やゝ暫くありて、先手廿騎計りを、木幡四郎右衛門引連れ、城下近々と打迫りける處に、鈴木彦九郎、岡野左内に囁きけるは、今日の大物見の内には、政宗・實元・成實の中、一人は是あるべきかと覺え候。手輕き若者、馬強なる輩を遣され、討止め給へと申しけり。左内聞きて、誠に左様に覺えたり。我れ馳向つて、討取らんとて、櫓より下り、門を開いて駈出でたり。木幡が先手廿騎の兵、元より本庄繁長を恐るゝ事斜ならず。左内が猩猩緋の羽織に、金の切團の腰差にて、駈出でたるを見て、すはや、繁長なるはと騒ぎける處を、左内、勝に乗つて透間もなく、鐵炮を打懸ければ、廿騎の木幡が勢、逃退いて二陣に加はらんとす。岡野左内、七十餘にて追懸けたり。其中に、鈴木彦九郎、竝を放れて追詰めければ、木幡四郎右衛門馬を引返し、爰にて防ぎ戦はんと、下知しけれども、士卒、大半崩れ逃げければ、詮方なく、木幡馬を乗離し、鎧追取つて懸りけり。岡野左内は之を見て、木幡を見届け、鎧玉を取つて走懸り、木幡と鎧を合せ、火を散らして戦ふ處に、鈴木彦九郎、大身の鎧〔横イ〕を振つて脇鎧〔横イ〕に懸り、木幡が左の脇壺へ通し、倒るゝ處を押へて、首を取つて差上げたり。福島〔横イ〕の城中、櫓の上も塙裏も、之を見る輩、一同にとつとぞ悦びける。本庄繁長は、高櫓より

塵を振つて、左内討たすな、續けや者共。と下知しければ、尻高左京・手塚長右衛門・宇佐美民部・西條治部・大平左吉等八十餘騎、西の木戸を開きて駈出で、木幡が二陣へ斬つて懸る。木幡が百騎、大將四郎右衛門討たれるに依り、一支もせず、川を渡して引退く。尻高宇佐美等追駈けしかども、政宗方、早々引きける故に、手合はずして、皆福島〔横イ〕の城へ歸りけり。宇佐美藤三郎は、川中にて政宗方と、鐵炮にて互に相だめにしたりしが、藤三郎早くして、政宗方を打倒しけれども、敵十人計り返し合せ、死骸を肩に引掛け除きし故に、首をば取らざりけり。唯今日の手柄は、岡野左内一人にて、止まりたりとぞ申しける。政宗は、木幡が討死を聞き、無念至極に思ひけれども、本庄繁長が武勇に退屈して、福島へは取懸らずして、逢隈川の西に停つて、築川の城へ取懸け、須田大炊助長義を攻めんとぞ謀りける。初め政宗、福島筋に働きし時、築川の城に手當あるべしと申しけれども、政宗は、逢隈は大河なり。須田大炊は廿三歳にて乳臭き若者、何とて川越すべき。思も寄らずとて、手當を置かざりけり。地侍に、小原作内といふ者の後家、女なりと雖も、甲斐々々しく鐵炮十八挺出して、築川の城を押しけるが、須田大炊助下知して、猿渡源内を遣し、川を渡り、小原が十八人の鐵炮の者

を、一人も残さず討取りけり。政宗、彌、怒り、築川を攻め落さんとして、三月廿八日の夜、逢隈川を渡り、築川の城近く陣を取り、明くれば廿九日の明方に、築川の城より、須田大炊助長義、六千餘にて押出し、大筒種子島にて打立て、一戦を取結ばんとす。政宗の先手、少しく手負、死人出来ければ、政宗も思はれけん。俄に陣拂し、川を渡りて引退く。須田大炊、之を見て、手自ら相圖の旗を振りければ、宵より伏置きたる伏兵共、四所より起合ひ、鐵炮にて打立つる事、雨の降るが如し。政宗の諸軍、大いに騒ぎて、亂れ崩れける處に、逢隈川へ逃入つて、討たる者數を知らず。須田が伏兵共、鐵炮を揃へ散々に打つ。片倉小十郎三千の備、先手なりければ、引足には後殿となりけり。須田大炊、真先に進んで、片倉が手へ斬懸りけるに、片倉も討死と極めて、士共を皆々馬より下し、地に折敷かせ、鎧を作りこたへければ、大炊が軍兵も折敷き、十五六間隔て、立合せ、片倉が引取らば、即ち追討たんと白眼居けり。片倉も、九死一生になりて難儀に思ひ、使を濱田治部方へ遣し申しけるは、政宗公を始め、諸軍皆引取り候は、いかなる事にて候。片倉一手を見殺し候や。さりとは、卑怯なりと申し遣しければ、濱田、使を走らかし、政宗へ此旨を告ぐる處に、政宗聞きて、早々、濱田、

川を越え、片倉を引取らせ候へ。兩人罷越し候は、難なく引取り申すべく候。兩人にて引取る事ならざるに於ては、何程人數を遣し候ても、成るまじといひ捨て、捨鞭打つて、跡をも見ずして引取りけり。夫より濱田は、川端まで返し來り、此旨申しければ、片倉返事に、濱田は、川を越さずして、川端に人數を立て、待ち候へ。鐵炮を二百挺、川を越させ候へと申遣しければ、松岡清左衛門組百挺と、山岸修理組百挺を差越しけり。片倉、下知して曰く、松岡が百挺は、川端に立つて待ち受けよ。山岸百挺は、我が備の跡脇に立つべし。我等人數にて合戦を始め、其勢に引きあぐべし。其時打立ち候へと約束して、片倉真先に立起り、軍兵一同に、大炊が陣へ突懸り、互に黒煙を立て挑み戦へば、大炊が先手の勢、廿間計り突立てられけるを、鹽合しはあひとして、片倉人數を引取りけり。大炊が先手取つて返し、片倉を追懸ければ、山岸修理、鐵炮を下知して、二三間に引受け打立てけるに、須田大炊が兵共、甲を傾け、ひた／＼と折敷き、鐵炮を避くる間に、片倉は川端迄引取りけり。大炊は塵を振り、山岸が百挺の鐵炮を追立て、片倉を追ふ事甚だ急なり。片倉の人數、逢隈川へ逃入り、人馬流る、事數を知らず。松岡清左衛門後久左衛門尉と號す川端に立固め、百挺の鐵炮にて打立てけれども、須田が軍兵、

事ともせず、眞黒に切懸けしかば、松岡が鐵炮組もどつと崩れ、片倉同前に逢隈川を逃渡り、流るゝ者、又は討たるゝ者多かりけり。須田が軍兵共、勝に乗つて追駈け、川半ば迄追懸りける處に、筑地修理進、大炊に乗著き、敵の二陣、川の向に立固め候。長追ひ候はゞ、越度あるべし。最早御引取り候へと諫めけり。佐竹加勢車丹波も、大炊前に乘塞がり制しければ、大炊も川半ばより引取りけり。片倉は濱田が二陣として、川向に立ちたるに助けられ、鰐の口を遁れたるよと、打連れて引取りけり。政宗の軍兵四百八十八人を、上杉方へ討取りけり。大炊は、其首共點檢し、築川の城へぞ引入りける。政宗も人馬を休めん爲め、白石の城へ引籠りければ、其後、軍はなかりけり。本庄繁長は、老功の名將なりとて、政宗、恐れける事少からず。其故、福島へは取懸らず。須田大炊は、廿三歳の若輩といひて侮り、築川の城へ取懸け、思の外に手を取りければ、世上の聞え、第一には、將軍家の御前を、如何あらんと氣遣はれけるとぞ聞えける。

去年、東國方諸將の高名比類なし。八月廿二日、卯の刻に、先陣は福島、次に長岡・京極・黒田・加藤・藤堂・田中・井伊・本多次第々々に押出し、河上の相圖の煙を見れば、狼煙は空高く晴揚る

に、早や遙に鐵炮の音、夥しく聞えければ、正則、此軍に駈付けざりしを、無念に思ひ、氣色を變じて、河岸に臻る處に、竹々鼻の城主杉浦五郎左衛門並に毛利掃部、又岐阜よりの加勢梶川三郎・花村半右衛門等、起の河向に芝居を築き、柵を振り、弓鐵炮を仕懸けて、雨の降る如く打立てたり。折しも此所は、俄に砂入して、築上げたる堤なれば、馬の足途悪しく、進み難き故、東軍、河下へおり下つて。加々野江村の邊より一々に乗越えけるに、杉浦・毛利・梶川・花村も身命を抛つて戦ふと雖も、防ぐ術や盡きにけん。竹々鼻に引取りけり。本丸には杉浦、二の丸には毛利・梶川・花村楯籠る。少勢の事なれば、攻め潰すも易かるべけれども、福島は、毛利と親しきに依つて、降參あらば、御前の儀は、聊か氣遣あるべからず。能く／＼執成申さん、本領異議あるまじき旨、委細にいひ入るゝに依り、無事を相調へて、二の丸を明け渡しけり。本丸も和睦あつて然るべしと、色々に諫むと雖も、杉浦、曾て承引せず、一度不義の名を汚して、百千年を経るとも、終には死すべき此身なり。人死して再度生せず。水流れて又歸らず。身は泉下に朽つるとも、名を雲上に揚ぐるをこそ、武士とも人ともいふなれとて、思切りし有様、潔くぞ聞えける。寄手も、是非に及ばずとて、取巻いて攻めしかども、元

來要害よき城地といひ、殊に杉浦、義心金鐵の如くにして、命を捨て、防ぎしかば、たやすく落つべしとも見えざりければ、寄手、辰の刻より申の刻の終まで、大勢透間もなく入替へ入替へ攻めければ、城兵、手負或は討死して、防ぎ難く見えければ、城に火を懸け、杉浦既に自害せしかば、殘兵悉く殉死申すと呼ばはり、主人の死骸を取圍み七人自殺せり。主從最後の體、聞く人、感歎せずといふ事なし。此外、岐阜の城より十八丁、南に當つて嶮岨なる山あり。此地に新城を取立て、壘を掘り櫓をあげ、外構に柵をふり、逆茂木を引懸け、三成が家臣柏原彦右衛門・同息内膳・河瀬左馬助・松田十太夫、都合一千餘の兵士楯籠る。瑞龍山三箇所の砦の其一なり。東兵、同八月廿三日の卯の刻より、瑞龍山の西の麓に屯して、人數の手配をぞ定めける。爰に淺野左京大夫幸長は、屈強の軍兵を引率し、手々に持楯を提げ、同西の山の手兩方より攻め上る。城中の者共、兼ねて期したる事なれば、つまりくの切所・木隠に、弓・鐵炮を伏せ置きて、之を専らとぞ防ぎける。寄手の弓・鐵炮に對揚せば、十分が一にもあらざれども、元來、山の案内を能く覺えたる事なれば、片側を小楯に取り、稲麻の如く群集せる寄手を、目あてに射放つに、更にあだ矢はなかりければ、手負・死人は數を

知らず。寄手も是に辟易し、少し猶豫する有様を見て、幸長、麾を振上げ、敵は小勢なるぞ。唯息な繼せそ者どもと、勇み懸つて下知をなし、四方よりして攻め上れば、城兵共、敵に跡をや取切られじと、城戸口迄さつと退く。柏原・松田下知して曰く、後詰をせん味方もなく、退路の便もなし。寄手は、味方に百倍して、四方皆敵勢なり。落ちんとせば、徒らに犬死せんは必定なり。上下士卒、心を一致にして思ふ程防戦し、討死せよといひもあへず、鎧を作りて出づる。寄手の方には、箕浦新左衛門・原傳三郎、眞先に進みけり。箕浦は隠れなき大力なりければ、三尺餘りの大太刀、打振り、大勢に渡り合ひ、數刻を移し戦ひしが、能き敵の首を取り、立歸らんとせし處に、城中より黒草絨の曝に、星甲に鹿の角打ち、七つ道具を軽々と脊負うて、大長刀を横たへ、箕浦を目懸け躍り出でたる其骨柄、傳へ聞きし西塔の武藏坊が再來かとぞ見えにける。餘りに強く追駈けて、名乗もあへず斬結ぶ。箕浦、ちつとも驚かず、大長刀を請流し、左に拂ひ右に迫り、前に當り後に廻り、少しも亂る兵法なく戦ひけり。今日の軍の花なるはと、數萬の軍兵、片唾を呑んで見物す。互に勝負も見えざりしが、難なく城兵を斬倒し、首掻切つて、靜々と本陣に著きてぞ引きにける。天晴手柄者

とぞ見えにける。原傳三郎は、聞ゆる精兵の手利にて、實に梢の猿をも、叫かしむといふ程の名人にて、向ふ敵を五六人、時の間に射伏せたり。城兵、少し白む處を、淺野喜七郎・伊藤八左衛門、引く敵に追續き、城戸口に駈付たり。されども敵、早く門を閉し、故に、塀を乗らんと、一番に喜七郎、續いて伊藤八左衛門・同又兵衛三人、乗越し戦ひしが、思ふ程働いて、一所に討死をぞしたりける。爰に三河の住人林水右衛門、忽ち城戸を打破り、味方を押入れて乗取るべしと切破るを、城戸を破られじと、鎧の穂先を揃へて、突いて懸り、入れじとす。寄手は、入らんと揉みに揉んで迫合ひしが、水右衛門手を負へば、齒がみをして引退く。友松彌五左衛門能き敵を突伏せて、首を取らんとせし處に、城兵、味方を討たせじと駈付けて、友松を磔と斬つて打倒す。されども、甲を透さねば、友松、頓て起上り、難なく敵の首を取る。危かりける勝負なり。斯かる處に、佐々忠右衛門が家の子に、杉浦源之丞といふ者、よき敵もがなと心掛け、八方に目を配り、暫く徘徊する處に、敵の大將彦右衛門、運命こゝにや縮まりけん。杉浦に渡合ひ、大將とは見えたり。遁さじ者をと斬り結び、柏原打負けて、杉浦首をぞ取りにける。之に依つて、残る軍兵も、或は討たれ落失せ^{〔け脱〕}るに、

巳の刻に落城せり。斯くて岐阜の城、後詰の押として、黒田甲斐守・藤堂佐渡守・田中兵部大輔・戸川肥前守等、威儀堂々として、川より東に陣を張る。時に石田・島津・備前・黄門、岐阜の後詰として、數萬騎を引率し、郷戸の宿迄押來りて、川を隔て、西の岸に控へたり。東軍の生駒正俊・寺澤廣高・桑山相模守・村越兵庫等も、此由を聞きて駈來る。然れども、郷戸の川水漲り、歩行^{からわたり}渉なり難くして、途を失ふ處に、田中、つらく思案して、家人野村を近付け、密に囁きけるは、いづくいかなる大河にも、淺瀬は必ずある者なり。此邊の郷人に、金子を取らせ語らひて、淺瀬を案内させよとありければ、野村聞きて、御了簡至極せり。藤戸といひし海にだにも、淺瀬はありと承る。追付尋ね參らんとて、加賀島といふ郷へ行き、此處彼處尋ねれども、家は多くありながら、人曾て見えざれば、兎やせん角やせんと駈廻りしに、梅ヶ寺といふ禪院あり。是へ立入り、住僧を頼み、淺瀬の通りを委しく習ひ見届けて、郎等一人走らして、本陣へ内通す。田中、大に悦喜して、急ぎ陣所を引取つて駈出し、加賀島の方へ押廻し、甘崎町川上の淺瀬に到つて、人馬を越し、向の岸に駈上る。黒田、此由を聞付けて、人に先を越されし事、易からぬ次第かな。同じ瀬を越さんも、無念なればとて、十町計

り川下に到りて、馬を馳込めば、思はず淵に乗掛り、既に危く見えしかども、長政、ちつとも騒がずして、引立てく泳がすれば、残る軍勢之を見て、飛込みく渡しけり。藤堂も追續いてぞ渡しける。黒田、此川の先陣ぞと、大音揚げて名乗りかけ、郷戸村の西の方へ押廻り、三成が同勢に横合に駆入りければ、藤堂・田中も續いて懸りけり。西國勢、之を見て、馬の足を立て兼ね、色めく氣色に見えける處を、小西・島津等、塵を取つて下知をなせども、三成が軍勢、後陣よりひた引にぞ崩れける。東國勢、一同に鬨を作りかけ、餘さじと追つて行く。三成が小軍將、松江といふ剛の者、後殿して道筋を引退く處に、田中が兵辻勘兵衛と名乗つて、松江と暫し戦ひしが、遂に辻が爲めに突伏せられしを、松原善左衛門、馳懸つて首を取る。黒田は、自身追駆けて、三成が勇士渡邊新之助を討取りけり。大將の我と手を碎きて、強敵を討ちし事莫大の高名なり。又木村九兵衛は、堤をやうく經廻り、大垣へ退きけるを、三成塵を振つて、敵は小勢なるぞ。返せくと下知すれども、耳にも更に聞入れず、大垣さして敗北す。東國勢、其勢に乗じて追駆けく討捨てけり。郷戸川より呂久の川の邊迄、斬捨てたりし死骸は、幾千といふ數を知らず、人塚をぞ築きにける。東國の軍兵は、大河

を越えて攻懸るを、西國方の將卒等、一支も支へ得ず、皆追討にせらるゝ事、薄連のなす處といひながら、淺ましかりける事共なり。同八月廿三日、河瀬左馬助は、秀信に従ひて、砦より引取り、本丸に楯籠る。木造左衛門・津田藤右衛門・百々越前父子は、追手の七曲口に於て、防戦すと雖も、寄手嚴しく攻め上るに依つて、引かんとするも自由ならず、返し合せ、今日を限と勵み戦ひけり。其外、岐阜方に名を得たる大岡角介・同角内・伊藤長八・和田孫太夫・木田彌左衛門・大野善八・飯沼十左衛門等、勇をなして防戦す。福島・長岡・加藤一所に駆寄り、其々に諸軍勢に下知をなし、坂口より武藤が砦の間へ、颯と寄つて駆入れば、押出し、押出せば駆入り、死して骸は曝すとも、引いて名をば汚すなど、互に恥しめて、微塵になれと攻め戦ふ。福島の先手同姓伯耆守、真先に進んで高名す。城兵津田藤三郎、血氣盛の若武者、殊更家名を下さじと、諸士に抽んで踏止まり、粉骨を盡して相戦ふ。長岡が軍兵幸田次郎助、好き敵ぞと互に名乗つて戦ひしが、幸田、遂に討死をぞしたりける。同郎等柳田半介、天晴敵もがたと窺ふ處に、生駒藤三郎と名乗つて、是も敵を待つ體なり。柳田透さず、駒駆寄り平三郎と渡合ひ、暫しが程戦ひしが、鎧をからりと捨て、引組んで上になり下になり、半時

計り揉合ひしは、二つともなき見物なり。何とかしたりけん。兩方、組む手を放さずして、遙の谷へ轉び落ちけるを、敵も味方も身を悶へ、あれはく〜と叫べども、何ともすべきやうぞなき。岩の角古木の杵に打付けられ、餘多の疵を得て、精力や盡きたりけん。兩人ながら、谷底に如狐々々と立雙び、溜息ついで居たりしが、柳田、力や勝りけん。又運命や強かりけん。終に生駒が首を取り、本陣さして歸りしは、危かりける勝負なり。又長岡が勇士澤村才次郎とて、鎧の名人あり。色白くやせがれたる小男なり。敵の中島傳右衛門といふは、大勇力の大男なりしが、澤村と斬結ぶ。其形勢は、鷲に雀鷓を合せなば、斯くやあらんと見えにけり。澤村が味方の士卒共、此勝負を危く思ひ、心を痛め息をつめ、身を揉んでぞ控へける。長岡、遙に之を見て、拳を握り齒嚙をして、如何あらんと思ふ處に、澤村、鎧を取延べて、敵の鎧の胸板をしたゝかに、ぱつしと突きけれども、敵の大男、札よき鎧を二領重ねて、著たる事なれば、大石杯を突く如く、鎧の穂先五六寸、むすと折れてぞ飛んだりける。澤村鎧を投げ捨て走り入りて引組みける。中島は音に聞えし大力、事ともせず、矢庭に取つて引伏せ〔か〕脱るを、澤村、早わざの手利にて、倒れざまに、中島が脇壺を刺通し、刎返して其儘

に、起しもあへず、首をぞ取りにける。主君長岡を始め、味方の士卒一同に、あつと感じけり。福島が勇士大橋茂右衛門は、多勢の中にわつて入り、腕も折れよ。刀も碎けよとなぎ廻し、功名をぞ勵ましける。又福島が扨從に、星野又八郎といひし者、能き敵と引組んで、首を取つて持ちけるが、肘の力や疲れけん。谷底へ取落し、又味方の者共之を見て、をしやといへる人もあり。又傍にはばか杯と嘲笑ふやからもあり。敵方の輩はにが笑ひするもの多かりけり。又八郎之を聞き、首が乏しき者かなとて、敵陣へ駈入りしが、先に勝るゝ首取つて、本陣に歸りしは、類稀なる功名なりとて、初め笑ひし輩も、稱歎せぬはなかりけり。此時に至つて、流石の武藤も、詮方なく本丸に取上る。秀信の旗本に、名高き津田藤三郎も、輝政の手へ生捕られ、又福島が兵卒に、梶田新助とて、器量骨柄人に勝れ、心も剛にて、力は國に雙びなき勇猛の兵、敵五人に渡合ひ、二人は首を取り、一人に手を負はせ、今二人の奴原を、手捕にせんとして勇みけるが、其勢に恐れて、息もつぎあへず逐電す。斯かる處に、木造が手勢百人計り、七曲より突いて出で、追手の山口にて防ぎ戦ひけり。其中に奥山といふ者、保元の爲朝・建武の本間にも劣らぬ程の精兵なりしが、重藤の弓四人張廿四束の大矢を

小山の如く積重ね、群る寄手を的にして、ばらり／＼と射放つ音、時雨につるゝ玉霰の、板屋を打つに異ならず。此矢にあたる寄手の士卒、或は疵を蒙り、又は當座に死するもあつて、暫く進み得ざりけり。七曲は福島と長岡、水の手は池田兄弟・一柳監物、此手は本丸に近き故、井川通を攻め上る。扱四方より一同に凱歌を作り、金鼓・螺貝なり渡り、喚き叫ぶ聲は、山川に應へ震動す。福島が郎等、勇力人に勝れしが、城中に駈入らんと進む處を、入れたてじと突出すを、鎧をかつぎ上へぬけ潛つて組討す。吉田又右衛門は、出丸の新櫓へ打入つて、内を見れば、敵數十人、矢種をば射盡して、打物抜いて控へたり。吉田は名乗りかけて、梯子を固め居たる處に、松原自閑といふ法師武者、走寄りて、吉村に言葉を懸けたりければ、吉村彌、勇をなし、著物を脱ぎ持つて、櫓の挾間より振出し、大音揚げてぞ名乗りける。長尾隼人、逸早く堀に著きて、既に堀に乗らんとするを、郎等に内野平左衛門とて、早業に名を得し者、早速堀に乗りしかば、己れが手を差下し、主人長尾を引上げんとす。隼人怒りて色を損じ、汝を頼んで城を乗取らんかというて、則ち堀に飛上りたり。其後、二の丸門前には諸手の軍勢數千人、我も／＼と馳集りて、本城へ押詰めんと勇みける。又京極修理亮高知

は、荒神の洞より攻め上る。輝政は、正則が攻口に押寄せんと、町口迄到る處に、其折節、正則は、總構の土居に上りて、輝政が攻來る手前の民屋に、火を懸けたり。依つて輝政の軍勢、煙に咽せんで進み得ざる故に、桑の木原に引廻り、長良川の邊に出で、水の手より攻め上る。諸手の軍勢、既に本丸にぞ乗入りける。然る處に、澤井左衛門・森勘解由は、木造と舊友たるに依つて、方便を廻らし參會を遂げ、種々に諫めて和を整ふ。其節に、秀信は既に自害に及ばんと、覺悟ありし處に、正則制して申されけるは、古より以來、三國の軍を考ふるに、或は數日・數年、挑み戦ふと雖も、既に難儀に及ぶ時、大將敵に降りし其例、あげて數ふべからず。是全く、命を惜んで然するにあらず。何卒命を存らへて、家系を續がんと思ふにあり。向後、志を翻し無二の忠勤を懷くに於ては、君も聊か御疎意あるまじきなれば、本領安堵あらんに於ては、何の仔細か候べき。能く／＼取繕ひ申すべき條、御心安かるべしと、詞を盡して諫め申されしかば、則ち自害を止めらるゝに依つて、多くの人を差添へて、清洲にぞ送りける。光氏は昔の筋目を忘れず、扈從と四人、降人の法として、帷子一重にて御供す。其日、新加納村の一向宗の道場に入らしめて、三重に柵をふり、多くの武士共圍繞して、

警固固く勤めけり。秀信は、流石に大將の心緒にて、今度の籠城に高名したりし侍共を召出し、各、感状を與へらる。斯かる折に臨んで、忘却なきこそ有難けれ。其人數、十三十六人並に三成が加勢河瀬左馬助・大西善右衛門彼是三十八人なり。

松川合戦政宗福島之城を攻むる事

政宗は、度々の合戦に打負け、無念類ひはなかりけり。去年七月、江戸より中澤主税を御使にて、景勝と取合ふ事、固く御制止ありけるに、其御意を用ひず、剩へ、數度のおくれを取りければ、何卒して一戦に勝つて、御前の申譯仕りたしとぞ願はれける。之に依つて、慶長六年四月十七日、片倉小十郎景綱・伊達兵部大輔成實同右京亮盛重・伊達阿波守屋代勘解由兵衛茂庭石見守・高野壹岐・桑折點了等二萬五千を引率し、白石の城に著かれけり。扱福嶋の城を攻めんと相談し、誰か物見に、遣し申すべしとありしかば、政宗從弟、伊達成實進み出で、某、罷越し候はんとて、十騎計り鐵炮三十挺つれて、福島之城へ赴かれけり。十三町手前に人數を残し、成實只一騎にて、福島之城堀端迄乗付け、大音揚げて申されけるは、是は政

宗が物見の者にて候。此福島の御城には、上杉殿御家中、誰に御座候ぞ。尋ね承れと、政宗申付け候て參り候。銘々に御名乗候へと呼ばはりけり。櫓の上矢間やまの蔭にて、上杉方の士卒、之を聞き、扱も大剛の兵かな。之を殺しては、情なき事なりと、矢・鐵炮を制し止めつゝ、櫓より答へけるは、上杉家中本庄越前守繁長・其子出羽守滿長・甘糟備後守清長・杉原常陸介親憲・五百川縫殿助清國・岩井備中守政房・鐵上野介景任罷在り候とぞ呼ばはりける。成實、馬を靜々と乗つて歸られけり。伊達家にも、上杉家にも、成實が剛強を、後々迄も稱美せり。政宗は、廿一日に、白石の城を立ち、小山といふ所に出張す。上杉方杉原常陸介甘糟備後守・本庄出羽守・岩井備中守・鐵上野介・栗生美濃守・岡野左内等五千に、浪人勢千餘、合せて六千にて、福島之城を立ち、松川に陣を取りたりけり。松川は、福島之城よりは一里なり。政宗は、度々の負軍に手懲して、卒爾に寄せ來らず。密に間の使を入れ、松川百姓共に、金銀を取らせ、相圖を定めて、上杉勢の油斷を窺はせけり。上杉方は、度々の勝軍になれ、政宗をば何とも思はざりければ、士卒、大に油斷し、皆網を張つて鳥を捕り、雀のしゝめき杯立て、陣の徒然を慰みけり。松川の百姓共、其油斷の有様を見届けて、女兒共の衣類を解き

て、旗に作し、或は筵杯を竿に付けて立竝べ、上杉勢の油断を、相圖を以て知らせけり。上杉の大將侍共、是は如何なる事ぞと、怪み問ひければ、旗は敵の目を奪ふ者にて候へば、此所に大勢罷在る體を見せ候はゞ、然るべきかと存じ、斯くの如くに候と申しければ、さもありなんと計りにて、誰れ咎むる人もなかりけり。政宗は、小山に陣を取り、日々に斥候を出し、松川の様子を見せけるに、村中に、兼ねて約束の相圖の旗を立竝べけり。天の興と悦び、柴田小平次・中目大學・石川彌兵衛五千餘を、築川の城の押に置き、政宗二萬餘にて、四月廿五日の夜半に、小山を立ち、瀬の上を通り、廿六日の未明に、松川さして押寄す。上杉方よりの斥候乗歸り、奥州勢寄せ來り候と註進す。陣々皆騒いで支度せり。上杉家の軍法にて、諸手を三つに分け、一組宛具足・甲一縮し、唯今、打立つ様に拵へ、二時宛急度待居る事なり。此時は、栗生美濃守・岡野佐内當番なれば、組勢其儘取合せ、松川渡瀬へさして押出す。頃しも、霧夥しく降りて、咫尺の間も見わかざりけるに、瀬の上の方より、商人・高野聖二人來りけり。上杉の諸大將に向ひて、政宗殿、其勢三萬計りにて、唯今此方さして御懸り候。などか此小勢にては、中々、御叶ひ候まじと、語り捨て、打通りけり。本庄出羽守滿長は、諸大將

に向ひて、松川を前に當て、防戦ひ候べきか。又、敵方より乗り渡させて、討取るべきか。得失如何と問ひければ、松本内匠助岩井備中守が曰く、政宗、我が虚を窺うて、其不意に出でんとする處を、此方より川を渡し、遮つて逆寄にせんと申しけり。栗生美濃守は、いやいや此川なかくはにして藥研の如し。たやすく渡る事成り難し。殊に政宗大軍なり。唯松川を前に當て、其半途を討たば、然るべしと申しけり。岡野左内は、黒具足に猩々緋の羽織を著し、角榮螺の南蠻甲を、猪首に著なし、黒の馬に乗りたりしが、歩ませ寄り、某は左様に存せず候。古よりの諺に、百聞一見に如かずと申傳へ候。未だ敵の多少も見ずして、進むべき所を進まざるは、後難遁るべからず。我等に於ては、此川を渡つて敵を待たんといふ。栗生美濃守が曰く、兵書にも、敵を料らずして、小勢を以て大敵に當る事は、大に戒めたり。今、大敵の到ると聞きて、利も見えぬ合戦をせん事、愚なり。只まげて此方に控へ、敵に川を越させ、其半途を討たんと争ひけり。左内は、中々肯はず、栗生と問答して論じける處へ、甘糟備後守・杉原常陸介、乗切つて馳來り、問答口論も勝負の益ならず。先づ斥候を遣し、政宗が川を越すべきか。越すべからざる様子か。見届けさせよと申しければ、本庄出羽守、馬より下

り床几に腰を掛け、猪俣主膳・本庄團右衛門・井筒小隼人を、物見に遣しけり。猪俣馳歸りて、政宗は、川を越すまじく候といふ。本庄出羽守・甘糟備後守、其仔細を問ふ。猪俣申しけるは、政宗、我が不意に出で、取懸らんと存じ候へども、此方待受け候を見て、川端迄來りたるを一利とし、引取る體に見せ、上杉衆、川を越えて追ひ來らば、半途を討たんと謀る體に、見及び候といふ。諸大將、何れも溜りける處へ、井筒小隼人・本庄團右衛門乘歸り、政宗は、川を渡して懸らん事、半時の内なりとて、出羽守・常陸介之を聞きて、猪俣主膳に向つて、只今兩人の見積と、其方最前の見積と違ひたり。政宗、川を越すまじとの其方見積は如何。猪俣答へけるは、政宗が人數、川越の支度もなし。泥漳沓を取らず、足輕共、箠も常の如くに付け、小荷駄・雜人も川下へ除け申候。是れ川を越ゆまじき相色といふ。小隼人・團右衛門申しけるは、左様にてなし。政宗、未だ川端より五町計りに控へたれば、川越の身支度あるべからず。打ひて、渡るに及でん、何の手間入るべき。又歩者・小荷駄を川下に立つるは、馬武者に川上を乗切らせ、下手に付て歩者・小荷駄を渡さんとの事なり。其上、度々の軍さに打負けて、無念を晴らさんとの意趣を持つて、二萬の勢を催し來る。政宗が川を渡らずし

て、空しく歸らんや。只今、川を越え懸るべしといふ。諸大將、皆一同に團右衛門・小隼人が見積よし。左様候はゞ、川端を去つて、二町計りに備を立て、政宗が川を越す處を、半途を討たんと評定して、川端二町・三町しざりて備を立て、政宗が渡すを待懸けたり。岡野左内は、先刻の言葉を、空しくせん事を無念に思ひ、手勢五十騎計りにて、軍法を破り川を乗渡し、松川の向に備へたり。栗生美濃守が曰く、何れも大將達より御下知にて、川越さずして、政宗が渡る處を討取れとの定にて候。左内をたよりて、一人も越え給ふなと、乗廻し／＼下知しけり。然りと雖も、岩井備中守・寺瀬對馬守・横井太郎兵衛・深尾市右衛門・保科吉内三侯・九兵衛・綱島豊後守・布施次郎右衛門・北川圖書・小田切處左衛門・志賀與惣右衛門・高力圖書・外池甚五左衛門・安田勘介等二十騎計りは、左内が思ふ所を恥ぢて、軍法を破り川を越えて、左内が陣へ馳加はる。之を見て後陣の兵共、後日に左内・備中以下に辱しめられん事を遠慮し、又左内等に、手柄をさせん事を憤りて、追々に川を越して、左内が陣へ加はる者多かりけり。杉原常陸介、乗廻し制しけれども、用ひずして七八十騎、川を渡りけり。宇佐美民部、馬を渡口に立て、跡より渡らんとする者共を諫めけるは、少しの恥を患ひ、小義を立つるは、丈

夫の志にあらず。川を越して利なきを知つて、尙越えんとするは、道理に背けり。あるべき事にあらずと申しければ、夫よりは越さざりけり。さる程に、政宗は、片倉小十郎・伊達阿波守等十二段に備を立て、河原を一面になして、眞黒になつて懸り來りける時しも、西風吹來つて、霧を吹拂ひければ、目に懸る蔭もなし。岡野左内、僅に四百計りにて川を越え、同勢を離れて備へければ、政宗は、使を遣し、降參の分か又一戰の志かと問はせけり。左内、大音にて合戦を仕る者なりといふと等しく、鐵炮を放懸け、鬨をどつと揚ぐる。政宗が先手片倉桑折・茂庭等四千餘、東西より左内勢を引包んで、一人も餘さじと攻め戦ふ。左内は、兩刃の長刀を持ち、爰を最期と相戦ふ。岩井備中・布施次郎右衛門・小田切・外池高力・北川等、大勢の敵の中へ駈入り、此處に馳抜け、彼處に乗廻し、火花を散らし戦ひけれども、多勢に無勢叶はずして、皆押隔てられ、討たる者半ばなり。左内も、矢四筋迄射立てられ、鎧疵刀疵三ヶ所負ひけれ共、薄手なりければ、安田・小田切相共に、百餘兵にて十重廿重の圍を切抜け、川の渡さして引きて行く。政宗の大軍、勝に乗つて追懸けたり。北川圖書は、小田切所左衛門に申しけるは、事既に急なり。我は爰にて討死すべし。我が子、未だ幼少にして會津

にあり。我れ死せば、生立つ所不便に候間、年來の芳志には、我等子を、貴殿養育して成人せば、景勝公へ奉公に出し給はり候へ。則ち之を遺物に渡し候間、我が子に渡し、形見に届け給はれとて、具足羽織を脱ぎて、小田切に渡せり。所左衛門は、之を請取り、腰にまき、戦場の習、我が身も生死計り難し。されども若し助かり歸りたらば、御子息へ渡し申すべしとて、川へ乗込み渡しけり。北川圖書は、形見の物を小田切に渡し、幼兒の事を頼置き、今は思置く事なかりければ、持たせたる指物金の公卿くぎやうを取つて差しつ、馬を引返し、鎧ふんばり大音揚げて名乗りけるは、我は是景勝が侍に、北川圖書といふ兵なり。只今討死するぞ。首取つて、政宗に見せよといふ儘に、大勢の中へ駈入り、縦横に切つて廻り、六騎に手を負はせ、五騎切つて落し、終に討死したりけり。布施次郎左衛門・安田勘介・高力圖書は、皆之上杉の精兵にして、日頃、北川と懇志に伴ひ申通せしが、北川が討死するを見て、年來の朋友にて、争か見捨て申すべき。いざ引返し、北川と枕を並べんとて、馬の鼻を並べ取つて戻し、大勢の中へ駈入り、火を散らしてぞ戦ひける。今を最期と戦へば、面を向くる者はなし。唯遠矢に、弓・鐵炮にて打立て射立てしかば、三騎の兵共、敵十二三人討取り、皆枕を並べて討

死す。是等に駈立てられ、政宗が先手も、群立つて控へたり。政宗、大に怒り、唯一騎にて先手へ乗込み、只追討に川を越せといらちけり。岡野左内も、長刀打折りて、太刀を抜いて、返合せ戦ふ處に、大將と見おほせ、政宗自から乗付け、左内が總角附を、二刀たゝみ掛けて斬付けたり。左内、急度驚き振返り、鏝元迄血になりたる二尺七寸の貞宗の刀にて、片手討に丁を切り、政宗の甲の眉庇より膝がしら、鞍の前輪掛け、切先はづれに斬付け、よわる所を、左内太刀にて、政宗の太刀をなぎ折りければ、政宗、二三間引退く。左内は政宗とだに知りたらば、組んで討つべかりけれども、物具龜相に見えければ、端武者なりと心得、馬を川へうちひてゝ、跡をも見ずして渡しけり。伊達の兵共、政宗が左内に切立てらるゝを見て、廿騎計り駈付けたり。政宗、力を得て差添の一尺八寸の刀を抜き、左内を追駈け、勝負せよ卑怯者なりと呼ばはりけり。左内は、向の岸へ乗上げ見れば、敵大勢馳せ來り、返せ返せと呼ばはりけり。左内は大音揚げて、眼のきゝたる剛の者は、左様の大勢の中へは、かへさぬ者ぞ。己は糞を喰へと惡口し、味方中へ駈入りけり。後日に、政宗なりと聞傳へ、組んで討つべき者をと、後悔すれども甲斐なし。先駈の上杉勢、大方川を渡り引取りけり。中

に岩井備中は、甲首二つ討取りけるが、川越の土産に候とて、本庄出羽が前に投げにけり。ゆゑしくぞ見えたりける。大館左馬進・宇佐美兵左衛門藤三郎事は、何れも首一つ宛討取つて、川の向の岸へ下りけれども、馬放れければ、渡り得ず。宇佐美民部は此方の岸にありしが、之を見て、馬を川へ乗込み渡しけり。栗生美濃、之を見て先刻の言葉と違ひ、川をば何とて越され候ぞと呼ばはりければ、民部振返り、川向に忤兵左衛門罷在り候。十七歳に罷成り候を、敵に討たせては、何事も入り申さず候よと言捨て、川を乗渡し、馬上より兵左衛門が手を取り、馬を引返し、川を渡つて元の岸へ上る處に、紙手半月の赤纜かけたる敵追來り、民部が妻手に乗竝べ、むす組んでどうと落つ。民部大力にて敵を組敷き首をかく。兵左衛門は、下り合せて近づく敵を追拂ひ、父民部が馬に乗るを見て、我が身も、父が討取りたる敵の馬に打乗りて、杉原常陸が備へ馳入りけり。政宗の大軍、既に松川へ打入りて渡り來る。栗生美濃守は、備を厚うして待ちけるが、政宗が勢、半渡になりたる處を、美濃守、塵を振り一度に鍵を入れたりけるに、片倉が勢、川へ追ひひたされ流るゝ者數を知らず。栗生、勝に乗つて川へ乗込み、追討にしたりけり。本庄出羽守・杉原常陸介・甘糟備後も切懸り、

政宗先勢を追立て、松川を乗渡しけるに、二陣の伊達阿波守は、片倉を助けんとせす、徐々
と引取る。杉原常陸介、之を見て敵は誘引と見えたり。長追するなと下知しけるに、案の如
く伊達阿波守、四千餘の勢に政宗旗本と、一手になりて驀地にぞ來りける。川中迄追懸る上
杉勢、引返して此方の岸へ上る處を、片倉も、桑折點了、伊達成實、屋代茂庭も、一同に川を打
ひて、渡り來りければ、味方六千餘、政宗二萬なれば、遂にかけまけて、總敗軍となりにつ
り。鐵上野介・杉原・本庄等乗下り、返し合せ〔戦ひ〕て、味方を退かせけり。岩井備中守瀧星の指物、
杉原常陸介絲だての指物、本庄出羽守大天つき立物の甲、青木利兵衛鳥毛棒、永井善左衛門金の半月だし末、小田切
所左衛門後に二才の伊豆、千坂與一郎・井上隼人正・市川太郎・西條彌三郎・寺尾源藏・大寶兵部・大峽惣八
郎・下條與五郎・秋山伊賀守・安田新太郎・甘糟惣五郎・西片次郎右衛門・川田玄蕃・正木大膳水戸
小七郎・山吉圖書・恩田越前守・志賀與惣右衛門・外池甚五左衛門・築井圖書〔矢内イ〕五拾騎計りにて、諸
軍の跡に引下り、引返し、返合せ戦ひけり。政宗勢、皆駿馬に鞭をあて、急に追ひ來りけ
れば、上杉勢、長柄を持つ事叶はず、持鎧さへ大方捨てたりけり。況んや肥え太りたるは、人
も馬も皆息きれて倒れ伏す。返し合する者共、討たるは多く、助かるは少し。松川より

福島之城迄、死駭と鎧・長刀にて地を敷きけり。甲・小手杯も、解捨つ者多かりける。青木新
兵衛は、年來小だけなる馬を乗り、鎧も短き十文字を持ちけるが、少しも痿ひよまず、馬に乗りつ
下立ちつ、引返して突卻け、又取つて戻し追拂ふ。其外、鐵上野介・本庄出羽守・甘糟備後守
等馬を立直し、所々にて〔取つ〕返して防ぎ退きにしたりければ、松川より福島迄、一里餘の其
中に、廿八度迄ぞ戦ひける。政宗の兵に、四竈或は色摩縫殿助、大剛の兵なるが、鐘つきかねの繩をかけ、眞
先に追來りけるを、上杉方〔矢内イ〕築川圖書引返し、四竈と引ん組で、馬より下に落重り、四竈縫殿
助、上になり圖書を組伏せけるを、圖書が郎等に、長市七郎左衛門下り合せて、四竈が首を取
つて、主の圖書を助けたり。福島川へ懸る處にて、甘糟備後守、廿騎計りにて立泳へ、政宗
が勢を、六度迄突崩しける。其ひまに、皆々福島川を渡りけり。されども、茂庭・羽子田・屋
代・桑折四備、又追ひ來りければ、殿しんがりの五十騎計りも川を渡しけり。小田切所左衛門先へ渡
る。續いて永井善左衛門渡しける處へ、政宗の兵三騎乗付けて、三刀迄切りけれども、永井
も、廿八度の合戦に草臥果て、其上數千の人馬、川を乗渡す水音と喚き叫ぶ聲にて、敵の追著
きたるを知らざりけり。斯かる處に、青木新兵衛退懸り、三人の敵を追拂ふ。永井は知らず

して川を乗上げ、青木乗付け、川中にて、敵三騎付け候を、我等追退け候といふ。永井驚きて見るに、實に纒に太刀あと三所、鞍の後輪にも二刀跡ありければ、永井は青木に向つて、助けられ候とぞ申しける。川の堤際にて、小田切所左衛門、馬より下り立つて、敵二人に取懸られ、既に討たれんと見えけるを、青木新兵衛乗付け、二人の敵を追拂ひ、小田切を助けけり。小田切は本庄出羽守が組、青木は甘糟備後が組なり。昨廿五日夜、青木と小田切と武邊の事にて、口論を仕出し、甲乙は、重ねての手柄にて極むべしと約束せし故、今朝前手の合戦の音を聞き、中小屋より青木は駈著けしに、道にて小田切が一合戦して、除き來るに逢ひ、共に後殿をするとて、青木は小田切に言葉をかけ、夜前の言葉を忘る、なといひければ、小田切も心得たりと申せしが、只今青木に助けられしかば、向後は他事なく申通すべしとて、夫よりは入魂しけるとかや。小田切、後に才の伊豆と號す。加賀利常と罷在り、後、道仁といふ。元は御譜代にて、小田切加兵衛といふ者なり。津川彈正・宇佐美民部父子・金津新兵衛・吉江喜兵衛等、川の渡上りにて返し合せ、度々、政宗勢を突退けしかば、川中に立止まり、是よりは追はざりけり。其上、岡野左内、羽黒山出羽の羽黒にはあらず、是は奥州の羽黒なりの麓に旗を立て、敗軍を立直しければ、政宗の先手も、川半より引返しけり。本庄出羽守・杉原常

陸介・甘糟備後守等の諸大將、福島之城大手の門前にて、皆馬より下り、床几に腰を掛け、敗軍の人数を城へ取込みけり。岡野左内も旗押立て福島之城へ入りければ、後殿の甘糟計りも、左内が跡に付きて城へぞ赴きける。堤より七八町も除け來り、左内は最早城へ入りける時分、政宗三百騎計りにて、歩者一人もなく、眞黒になつてぞ追ひ來りける。甘糟・栗生・岡野も、急に敗軍を取込み、引續いて城へ入り、柵の木戸を打ちければ、後殿の十騎計りは、柵の外に立出され残りけり。宇佐美民部は、嫡子兵左衛門が乗馬を乗倒し、歩立なりけるを、馬上より手を引きて柵涯へ來る時、政宗、近々と追來りければ、永井喜左衛門馬より下り、宇佐美兵左衛門を抱上げ、鞍臺に立たせ、夫をふまへて柵の中へ押入れけり。善左衛門と民部は、柵を乗越え入りにけり。津川彈正・大館左馬進は、搦手の門へ廻り入りにけり。青木新兵衛は七幅七尺の大纒・大鳥毛の標たしなりければ、柵を越す事なり難く、彼方此方と佇み、何方か入るべき所ありと尋ねける處へ、政宗、唯一騎にて乘來りけるを見て、青木、十文字の鎧にて、政宗の内甲を目懸け突きければ、甲の立物にあたり、三日月の一方の爪を突折りけり。政宗は、叶はじと思はれけん。馬を一散に馳せて退かれけり。福島之城主本庄繁

長は、二千餘にて西の門より打つて出で、信夫山の方より、政宗の右跡へ押廻りけるを見て、早々政宗引取りけり。繁長は、小高き所に備へて、政宗と對陣せり。築川の城主須田大炊助長義は、横田大學築地修理車野丹波に向つて、政宗今朝、松川の陣を破りて、上杉勢を追つて、福島さして赴くとなり。いざ逢隈川を渡し、押の人数を追散らし、政宗が跡より切懸らん。尤とて六千餘の兵卒、築川の城を乗出し、大炊は、人数を二手にわけて懸りければ、政宗方柴田小平次・中目大學・石川彌兵衛五千餘、川向に控へたり。此逢隈は、奥州出羽第一の大川なり。然れ共、大炊は渡り口を知りたりければ、車野丹波守二千を中備にして、正面より本瀬に向はせけり。須田大炊は、川上へ押廻したりけるを見て、政宗方も二手に分れて、川の上下へ廻らんとして、政宗備亂れ、旗色揉めて見えけるを、濱田大炊、遙に見て兩方の瀬より打ひて、渡しつゝ、左右より切つて懸りしかば、政宗方、どつと敗軍し、我れ先にと逃げたりけり。大炊、勝に乗つて追駈け、首三百餘討取り、すぐに政宗の本陣の小屋小山の陣屋へおし込み、悉く焼拂ひ、夫より政宗の跡を追うて、後陣へ切懸り、散々に切崩し、政宗が後陣屈強の兵、四百十三人討取り、小荷駄・兵糧・玉薬を奪ひ、剩へ、伊達の家の陣幕九つ星

の紋の幕、竝に家の什物、紺の絹に黄なる糸にて、法華經廿八品を縫附けたる看經幕をば、大炊が組曾田宇平次景勝米澤へ所替の後、堀丹後守直寄へ抱へらる・中村仙右衛門景勝所替の後、越前黃門秀康卿へ御抱奪取り、此旨、福島之城へ註進す。須田大炊が手柄、申すも中々おろかなり。政宗が後陣の軍勢共、須田に追崩され、福島さして逃來りしかば、政宗、大に仰天し驚き騒ぐ處へ、本庄繁長、旗を進めて駈け、れば、甘糟備後守・鐵上野介、福島より出立つて、挾んで攻め懸る。本庄繁長、川を渡して切つて懸りしかば、政宗は後陣の敗軍を聞き、色めきける處を、繁長切懸り、二百餘討取りしかば、政宗も計略叶はずして、本道を除く事成り難く、摺神より人数を引上げ、信夫山へ取除きけり。本庄繁長・甘糟備後・鐵上野等も追駈けて、信夫山へ對陣し、夜明けば切懸らんと支度せり。景勝、會津に居られけるが、政宗、大軍にて小山へ出でたりと聞きて、八千の軍勢を引率し、會津を立ち、昨廿六日の晩、築川へ著き聞かるれば、福島表へ、政宗取詰めたりと聞き、翌廿七日、福島さして押されけり。政宗は之を知らず、信夫山にありける處へ、遠見の者の方より、景勝出馬候由申候と告來る。是より政宗、騒ぎ立つて引取らんとする處へ、又注意あつて、紺地の日の丸の大四半見え候と、告げ來るや否や、政宗は取る物も取敢へず、總人数

をば本道を引取らせ、我が身は、景勝と本庄繁長を恐れ、僅に十騎計りにて、本道へは除き得ず、飯坂の北東、佐藤庄司が屋敷跡へ懸り、摺神川を沂つまひに、茂庭山を通り湯原へ出て、關を經て渡瀬より白石の城へ逃入りけり。總軍は、本道を除き行きけるを、本庄繁長父子杉原常陸以下、上杉勢勝に乗つて追討に、首數七百餘討取り、瀬の上を追返し、郡村に到りて追止まり引返しけり。信夫山より郡迄二里餘の間は、政宗の人馬の死骸・旗指物・鎧・長刀にて、足の踏所もなかりけり。景勝は、福島の城へ入られ、境目の仕置して、十日計り逗留し、境目を打廻り會津へ歸陣せられけり。此度、政宗方を討つ事、首數千二百九十餘なり。上杉の手柄、天下の美談とぞなりにける。

景勝御赦免〔付イ〕上洛〔并上杉系圖イ〕の事

奥州福島にて、景勝と政宗一戦し、大に打負け、敗軍の由、宇都宮に御座す結城少將秀康卿より、一書を以て、大坂へ御註進ありければ、大君、大に怒り給ひ、我れ始より斯くあるべしと思ひ、去年、中澤主税を以て固く制しける處に、一度ならず七八度に及び、越度を取りたる

事、言語道斷と仰せられけるに依り、其後、御約束の御加増の御沙汰もなし。政宗も、御意を背き、景勝と度々合戦致し、剩へ、おくれを取りたる故、御加恩の事は、夢にも存せざりけるとかや。さる程に、慶長六年の春夏も過ぎ、七月にも成りにけり。當秋は、島津を御退治なすべきか。上杉を御退治あるべきかと御相談あり。兩條共に、天下の大事なりとぞ見えたりける。君にも景勝は、逆心なくして、直江山城守が所行にてありける事を、能くしろしめされ、次には關ヶ原の後は、御敵の輩冑を脱ぎ降参を乞ひ、様々陳謝せられけるに、景勝一人は、治部方敗軍にも痿ひるまず、一言の降参を乞はず、會津に獨立して、去年九月より最上・伊達を相手として、二年越、合戦し、度々の勝利を得、今に至つて、稜かまを頽くさぐる事、眞の英雄と感じ思召し、罪科御赦免なされ、召仕はるべしと思召す御心著きにけり。其上、古き家といひ、御退治なさるゝも、惜き事と思召し、本多佐渡守正信を以て、景勝へ仰入れられけるは、今度の一亂、此方所存別儀なし。凡そ天下を望むも、弓箭を取るも、侍の習なれば、咎むべき處なし。何を以て深く遺恨を挾まんや。其上、景勝、始めより逆心なき事、明かに知見候上は、赦免を致し候間、早々上洛あるべき旨、申入れられけり。景勝返事に、我れ元、公に恨なし。神刺の

原新城を取立つる事は、直江が公儀を得て、事濟んだりと申すに依り、取立てたる儀なり。又合戦の儀、他の事なし。強ひて押懸け給ふにより、申分も罷成らず、一合戦仕るべき覺悟、是又武士の習なり。亡父輝虎以來、公へ等閑なく候間、此上は、御赦免にても切腹にても、御心次第の由、御請申上げられけり。斯くて、七月末になりしかば、結城秀康卿御取次を以て、同十二日に、上洛の御請を申上げけり。家老共は、直江・千坂・長尾を始め、御上洛の儀は御分別なされ、御無用の由異見申し候へども、景勝承引なし。我れ元來逆心なし。今上意を請けて、上洛仕らざるは、是實の逆心なりといひて、遂に上洛あつて、八月朔日に伏見へ著かれければ、同廿四日、御前へ召出され、今度の亂は、景勝に於て別心なし。早々上洛ある事尤なり。勿論、本領相違あるまじき事なれども、外への仕付の爲めなれば、會津領百五十萬石の内、米澤の城にて三十二萬石下され候由、仰せられしかば、景勝、其年に米澤へ移られけり。百五十二萬石の家中、五分一減じければ、譜代の侍共も、皆小身になつて、米澤へ赴くもあり。立身を心懸くるは、暇を乞うて浪人するもあり。新參者又諸浪人は、皆暇出づる。直江山城守は、三十二萬石なりけるが、此度六萬石を、景勝より給はりける。山城守は、忝しとて

五萬石を差配りて、諸傍輩へわり與へ、只一萬石になりぬ。五千石わけに、小身なる傍輩に割與へ、自身は、僅かに五千石なりしを、景勝より新田を開き、一萬石を直江に給はりけり。杉原常陸・本庄繁長を始め、五萬石・七萬石の身上、皆二千石三千石に減じけり。會津へは、蒲生秀行、六十萬石にて歸任仰付けられければ、栗生美濃・岡野左内は、蒲生家へ即き歸參せり。岡野左内は、政宗より三萬石にて抱へたしと、ありしかども、存じも寄らずとて、秀行へぞ參りける。〔壹萬石にてイ〕猪苗代の城主となる。岡野越後守とぞ申しける。景勝は、會津より米津へ移され候三年目に、千徳丸といふ子息誕生、後に上杉彈正大弼定勝と申しけり。淡海公不比等の二男房前大臣より七代、勸修寺内大臣高藤公より十二代、式乾門院藏人重房始めて丹波國上杉の庄を給はり、上杉と號す。又謙信先祖は、長尾なり。是は桓武天皇の御末、長尾新六郎定景より出でたり。之に依つて、平氏にて長尾たりしが、建武の末、前代蜂起の時分、長尾一味たりけるに依つて、尊氏より御退治なり。尊氏公の御母は、上杉左近將監頼成の御妹にて、贈從三位清子と申しけり。頼成の嫡子上杉宮内少輔藤成、其弟を上杉三郎藤明・同四郎藤景といへり。此二人は、尊氏の從弟なり。長尾の家を繼ぎ候へとの事にて、

此二人、長尾を相續致されたり。謙信は此子孫なり。此故に、元來上杉の庶子なりとぞ承る。さるに依つて、代々上杉の一家老なり。謙信代に、管領上杉憲政の養子となり、初め長尾景虎を改め、上杉政虎と號す。永祿二年上洛の時、光源院義輝公の時、輝の一字を下され、輝虎とぞ申しける。代々武勇の家にて、一門に名將多しとぞ申傳へける。文祿三年午極月に、秀吉公、景勝亭へ御成、即ち景勝を從三位權中納言に任せられ、清華に准せられけり。

杉原彦左衛門物語覺書條々〔二十三箇條の事イ〕

一、直江山城守兼續は、治部三成一味にて、關ヶ原御陣の御敵の第一なり。御誅伐あるべしと思召し候へども、今度の大亂に、國々の諸大名の家老共、治部に頼まれ、主人よりは一際、精を出したる輩あれば、直江を切腹仰付けられ候はゞ、皆々身の上と存じ、又逆心遂ぐべきも計り難し。直江を、御赦免候はゞ、彼をさへ御免の上は、我々は氣遣なしと存じ、自ら静まるべしとの御賢慮にて、直江を御免成されける事により、天下一統に静まる。其上、程なく景勝宅へ、台徳院様御成なさるべき旨、仰出され、關ヶ原以後、程もなきに、扱々思ひ寄らざ

る御事と、天下にての沙汰なりき。景勝、申上げらるゝは、大樹御成なさるべき旨、忝き次第、言語に絶し候。さりながら、我等家人は、田舎者にて作法曾て存せず候。萬事を本多佐州に頼入り、指圖を請ひ申すべしとて、侍下々迄、一人も残さず、下屋敷へ出し、屋敷には、景勝直江山城兩人残り居て、御料理も、方々門の番等、廣間玄關の番も、皆御旗本衆へ頼入りける故、將軍様、御機嫌斜ならず、天下にて景勝を分別者なりと譽め、大御所にも、中々御感なり。玄關前に、杉の葉にて葺きたる御廐出來なり。其前に、今度福島合戦に、政宗を切崩し、須田大炊助長義が奪取る伊達の家の什物法華經の幕を、御馬屋の前に打ち、九つ星の幕を臺所門に打ちたり。此度、御成の御相伴に、伊達政宗・藤堂高虎・施藥院宗伯法印なり。政宗は、我が重代の幕を、景勝門内の御廐に打ちたるを見て、赤面し、中々迷惑の體にて、笑止千萬なりしと、施藥院の物語なり。其後も、景勝息彈正定勝迄、御成の度には、右の例にて、奪取りたる經の幕を、御廐に打つなり。

一、直江山城守、後に將軍御父子様の御前へ〔ナシイ〕出て出頭し、參勤御暇の時も、諸大名並に御小袖御馬拜領なり。直江病死の時も、上使にて御香奠銀三百枚下されけり。

一、大坂冬御陣の時、鳴野口は、上杉に仰付けられ、朝と晝と兩度合戦なり。關ヶ原以後、御勘當御赦免の事なる故、景勝も、一と際御奉公振を致され、合戦中々、諸手に勝れ、家來にも、百挺鐵炮の大將石坂新左衛門討死、其外、上泉主水・關十兵衛・北條清右衛門・櫻ひとや囚獄・大俣八左衛門・同彦六・市川左衛門・針生市之助・原庄兵衛・駒澤與五郎討死仕り、多功豊後・坂田采女・松本助兵衛・北村茂介、勝れたる働高名なり。景勝先手の大將須田大炊助長義、自身太刀打にて、直取の高名首三つ手疵二ヶ所、比類なき働に依り、將軍様、御前へ召出され、御感狀御腰物御小袖下されけり。杉原常陸介親憲、佐竹勢へ加勢に參り、木村長門・後藤又兵衛とを、追返し候手柄にて、是も御前へ召出され、御感狀下され候。其砌、何れも御感狀御腰物・吳服・黄金等頂戴仕り罷在り候に、常陸は、包紙を開き、御感狀拜見仕り、本多佐渡守正信に向つて、御感狀下され候。有難き仕合に御座候。御吟味御文言、誠に以て忝き仕合と申し上げ罷立ち候。天下にて稱美仕り候とかや。其外、島津玄蕃、鎧を合せ高名に付き、御感狀下され候。鐵孫左衛門も、横合の鐵炮打たせ候下知宜しとて、御感狀下され候。安田上總介、二の先備にて、其日、比類なき働仕り候へども、直江と中惡しく候故、上聞に達せず、御感狀下されず

候。鳴野合戦の後、兩御所様、景勝攻口へ御打廻なされ候時、御目見致され候へば、上意には、此表合戦、其方を始め、下々骨折り候由、御懇なりけるに、景勝承り、童いさかひにて候故、別に骨折り候事も、御座なく候と申上ぐる。是又、天下にて景勝を譽め申し候由、杉原常陸も陣屋に歸り、越後・關東にて、若き時分より輝虎・景勝御供をして、度々の合戦に逢ひ、今や死する。今日や限ならんと思ふ烈しき合戦にさへ、取らざる感狀を、今度の心安く印地打つ程の事にて、御感狀拜領して、子孫の實に讓る事よとて、大に笑ひけるとなり。

一、前田慶次郎は、景勝より暇を出されけれども、其儘召仕はれ下され候へとて、五百石にて、米澤へ供をしたり。方々より七千石・八千石にて、抱へたしとて招きしか共、慶次郎は、關ヶ原陣にて、諸大名を見限りたり。治部が負けたると等しく降參し、追從輕薄、扱々男は、一人もなし。景勝計り、始より終迄、弓矢を取り臂を張り候事、適武士なり。我等が主には、景勝より外にはなしとて、在郷へ蟄居し、彈正代に病死せり。

一、關ヶ原以後、江戸・駿府の御城にても、直江山城守は、天下の御老中へ對しても、對揚の挨拶にて、中々、頭を下げ手を束ぬる事なし。大男にて辯舌よく、見事なる事なり。聚樂の御

城にて、政宗、懷中より始めて金錢の出來たるを取出し、諸大名に見せられしに、皆々重寶なる事として、手々に取つて見られ候時、政宗、金錢を持ち、直江に見せられければ、山城守は、扇を二けんひろげ、是にうけて見る。政宗は、我が隨身の物故、敬ひて手に取らずして、扇にて請くると心得て、山城、苦しからず手に取つて見よとあるを、直江申しけるは、我等は、景勝先手を申付け候故、軍兵を指揮し、幸ひ取り候手にて、斯様のむさき物、取り候者にて之なく候。錢は下賤の持扱ひ候者なりとて、扇より政宗の前に投返しければ、赤面せられけるとかや。

一、上杉家も、勸修寺の流にて、家の紋、竹に雀なり。伊達も、山陰中納言の流にて、竹に雀を用ふるにはあらず候由。

一、松川合戦に、北川圖書が方より、小田切所左衛門へ羽織を渡し、圖書が子の事を頼みたるを、小田切請取りし事、上杉家にては誹り申候。布施次郎右衛門・高力圖書・安田勘介は、北川を見捨てず、皆一所に討死したり。是にて小田切を、一入悪しく申候。

一、大坂鳴野合戦の時、須田大炊助備、三町餘敗軍致し候を、二の先手安田上總介手にて、横

合を入れ、大坂方七組並に大野修理・木村主計・竹田永翁を突き崩し、其日の軍、勝になる。比類なき働なれども、直江と中悪しければ、上聞に達せずして、御感狀下されず。其後、景勝前にて、安田上總介は、杉原常陸・須田大炊に向ひて、皆々仕合能く、上聞に達し、御感狀拜領目出たく候。但し我等は、取次申さる故、御感狀拜領致さず候。昔より數度の合戦に、隨分御奉公申上げ、人をば越し候へども、人に越されず候。其上今度、鳴野程の事を、我等功には申すべき様之なく候。今にはじめず、珍しからざる事に候。就中、我等に限らず、屋形への奉公に、身命を抛つて稼ぎ申候。曾て將軍への御奉公仕らず候故、御感狀少しも所望に存せず候。以來とても、屋形へ御奉公に、命を捨て申すべくと申候。何れも、皆返答なく、直江も、默然として居申候ひつる由。安田上總介は、小兵にて手疵故、左の足を引き、眼まなこざし光之あり、面にも疵の痕多し。何者が見ても、大剛の大將なりといはぬ人はなし。中々、するどき氣高き侍なり。右鳴野にて、須田大炊は我が備、敗軍せしを口惜しく存じ、大炊は若黨五人にて、敵の中に残りつゝ、太刀打にて甲附の首三つ、大炊直取に高名し、手疵二箇所負ひ、若黨五人ながらに高名させ、敵の中より出で歸りし故、此段、上聞に達し、御感狀下され候。

此大炊は、關ヶ原陣の砌、政宗を切崩し、伊達の家の幕を取りたる者なり。島津玄蕃は、大勢の中へ鎧を入れ、三人と鎧を合せ、沼の中へ突落され、立上り三人を突散らし、一人を討取り高名を致し候故、御感狀拜領せり。是は島津月下齋が子なり。

一、右嶋野口合戦、上杉、勝軍になり、城際へ詰懸け、景勝厳しく鐵炮迫合あり。上聞に達し、堀尾山城守忠明を御入替なさるべき間、景勝には、早々引取り、其場を堀尾へ渡し候へと、五の字の御使者、追々に乗來りける。〔候イ〕景勝不興して、此場を引取るべしとは、誰の指圖にて候ぞ。承り届けず候。縦ひ、上の御意にても、引取る事罷成らず候。軍には、一寸増と承るに、取りたる場を、人に渡し引取る法やある。少しも引取る事あるまじと、景勝が申すと、上へ申上げられよとて、少しも退かず、其場を取りしき申候。

一、輝虎代に、家老北條丹後守、大剛の侍なり。或時、一尺計りの白練の小四半に、黒蟻一疋書きて、指物に仕けり。餘りに小き指物故、謙信見咎め、丹後を呼んで、指物の譯を尋ねられるに、丹後答へて曰く、皆人三幅懸・四幅懸に、下猪登龍、其外、大紋を付けて指すは、敵方へ能く見えんとての事なり。其大指物より我等が小四半は、能く見え申すべく候へば、何時

の軍にも、間近く乗り申候程にと申しければ、輝虎機嫌なほりける由、此丹後は、謙信死後に、三郎と景勝と國争の時、萩田與惣兵衛に鎧付けられ、乗抜け候へども、其手疵にて相果てけるなり。三郎方、其儘敗軍にて候由。

一、輝虎、小田原の城を攻められ候時、明朝陣拂するとして、備配そなへくばりの書付を出すに、柿崎和泉守景家・長尾越前守政景・宇佐美駿河守定行以下、何れも功者共、謙信の前にて評定相極め候處に、新發田因幡守、十六歳なりしが進み出で、此備配にては、城より北條氏康切つて出で候は、御敗軍あるべく候。御改め然るべしといふ。謙信、怒つて悴の何を知つて、差出でたる事を申すと、散々に叱られ、因幡赤面し、左様候は、私に只今御暇下され候へ。小田原の城へ加はり、御敵になり、明日の除口を、私附け申すべく候。酒匂より此方にて、屋形様を討留め申すべしといふ。輝虎、機嫌直り、明日の殿を新發田因幡に申付けられ、宇佐美駿河、備をつれて是に加はり、堅固に引上げけり。此因幡守は、景勝代に氣に違ひ、新發田・五十君の兩城に楯籠りけるに依つて、天正十年十月に、景勝直に馬を出されしに、因幡切つて出で、景勝の先手に備へ、放生橋といふ所迄、切退きければ、景勝の軍勢敗軍す。因幡、勝に乗りて旗

本迄押懸り、既に大事に及びし處に、上杉彌五郎後に島山入庵は、景勝旗本の前備にありしが、景勝の日の丸の旗を追取り、三十間程先へ押出し、入庵手廻の侍共、下馬させ鎧衾を作り、備を折敷かせ候に付、因幡引返しけるを追討にし、城下迄押詰め候ひき。斯様の大剛の者にてありし故、幼少より器量之あり候。六年目に因幡討死致し候由。

一、前田慶次郎は、詩歌に巧なり。紹巴の弟子にて、連歌を致せり。上杉家にて、節々源氏物語の講談せしに、中々聞事なりしとぞ。

一、景勝の家にて、萩田主馬、武者奉行に候。萩田立除き候て後、蓼沼日向守・三股九兵衛、武者奉行なり。何れも大剛の覺の侍なり。越前黃門秀康卿より、様々御手入之あり、日向も九兵衛も、一萬五千石宛にて、御呼び候へども、景勝譜代の主にて候間、御免下され候へとて參らず候。此二人は、大御所様より能く聞召し及ばれ候者なり。

一、上杉家にては、尺の旗對の役旗なし。輝虎旗本印は、五幅懸の紺地の四半物に、朱にて日の丸を出し候一本と、白地に黒く毗の一字を書き候四半と唯二本なり。天文の末、弘治の頃、四半に黒く無の字を書きて持たせ、謙信自慢せられたるを、城意庵、謙信氣に違ひ、甲州へ走

りて、無の字の四半を指物にする故に、謙信不興して、無の字の四半を、宇佐美定行に呉れ候由、太閤の御代に、大御所様より、扇の御馬印を景勝拜領し、御馬印は金なれば、上杉家は淺葱にせらる。家中にも役旗なし。一手一隊に、二本一本〔心〕次第なり。尤も旗は笈子さしなり。腰革にて前に指すなり。

一、信州川中島合戦も、都合五度にて候へども、信玄と輝虎と太刀打は、天文廿三年寅八月十八日の事なり。甲州方山本勘介入道道鬼討死は、弘治二年三月廿五日の夜の事なりとかや。甲州方の説は、永祿四年九月十日といへり。兎角、川中島五箇度にて、其度々に、謙信判形感状を取りたり。上杉家の士共、子孫感狀相傳す。年號月日慥に之あり。右天文廿三年八月十八日、川中島合戦、御幣川にて太刀打の時、信玄も謙信も太刀なり。信玄、軍配團扇にて受けたりといふ事、遂に上杉家にて聞及ばず。甲陽軍鑑の説、慥なるべけれども、上杉家には、遂に其沙汰之なし。私にいふ、永祿四年九月十日には、上杉の家中荒川伊豆守、信玄と太刀打して討死せりと云々。

一、岡野左内は、上杉家にて一萬石取、松川合戦にて、政宗と太刀打し、猩々緋の羽織に、政宗

の太刀痕、肩に一つ、腰に一つあり。其を縫ひ合せつゝ、金のより糸を以て、切目に縫合めけるを、景勝御免にて、上洛致されし時、先を乗り申候。岡野越後守と號す。蒲生秀行に奉公し、會津猪苗代の城主たり。其子左衛門秀行逝去の時追腹を切る。其子源五郎は、蒲生宰相忠郷逝去にて、弟中書十八萬石になりて、豫州へ移る時分浪人せり。左内より南蠻宗故、身上有付なしとかや。始めは三井寺に引込み、後は京都に居、浪人にて病死。左内は隠れなき福人にて、金銀夥しく持ち、國に藏屋敷あり。會津にて黄金を、書院と次の間に布滿て、其上に居て、金子を見慰むる事度々なり。諸朋友の取沙汰に、左内は、金を弄物にするなり。人々のいひけるにも、唯町人の様なる者なりとて、悪しくいひなし、何事もあらば、金銀に心引かれ、臆病すべしと笑ひあへり。或時、右の通、黄金を廣間一杯に積並べ慰む處へ、我が組の侍、喧嘩仕出したりと告げ來れり。左内聞くと等しく、貞宗の刀を差し、祕藏の鹿毛の馬に打乗り、一散に駈付け、一日二夜附居て、色々と扱ひ濟しけり。其時、右廣間に廣げ並べたる黄金を打捨て、其二夜一日の間に、其金の事、家人にも申付けず、何とも思ひたる顔にてなかりし故、扱は左内は、武用の爲め計りに、貯へたる者にて、金欲はなしとて、諸人譽め、始め

誹笑ひし傍輩も、却つて感じけり。陣觸ありし度毎に、役者を呼びて、我が子の左衛門に能をさせ、出陣迄に毎日快く見物す。傍輩は、皆馬、物具、弓、鐵炮の支度にて騒動す。左内申すは、我等は常々に武道嗜み候故、出陣とても何の支度なし。何れもは、常は能囃子、連歌杯にて、遊び居て、陣觸の時、俄に忙しく御座候。我等も能、亂舞、好すきにて候へば、皆方々へ役者を呼び、隙なく〔レして〕參らず。陣觸之ありと、皆々出陣の支度にて、能もなく役者隙なる故に、一入能を致し候。明日討死も知れざれば、心を慰むとて、笑ひけるとなり。關ヶ原陣の前後、も、會津へ御發向とある時、掛硯に金銀の帳あり。我れ討死せば、焼捨てよと申付け、永樂一萬貫黄金萬兩なりを、景勝へ進上し、御事は關ヶ原まじく候へども、私は明日にも討死致し候へば、入り申さず候とて差上げ、傍輩中へも、金銀を配り、陣用意をさせけるなり。蒲生宰相殿代に、左内病死する砌、遺物として黄金三萬兩、正宗の太刀一腰を、忠郷へ差上ぐる。又黄金三千兩と景光の力を、中書殿へ進上す。傍輩にも、夫々に遺物遣し、日來の借りし手形箱一つありけるを、焼捨て申候由。

一、松川合戦の砌、青木新兵衛、殿して隠なき働し、其上、政宗と出合ひ、甲の立物を突き折り

候。總て、若き時より十六度の働あり。景勝、米澤へ移され候時分、暇出で浪人しけり。越前黄門秀康卿へ召出さる。永井善左衛門も召出されけり。加賀肥前守利長へ、茶の會にて、黄門秀康卿御越し、御相伴に政宗堀丹後守直寄・半井驢庵參候致され候砌、數寄屋にて、政宗申され候は、今度奥にて骨折り候能き者共を、黄門様には召出され候て、御重寶に存じ候。青木新兵衛、鳥毛の棒の黒纒十文字の鎧、瓦毛の馬に乗り候。中々鬼にて御座候と申候由、大坂兩御陣にも、手柄あり。後は法體して、方齋と申候。落合ト安田、青木事を永井善左衛門と取違へ、政宗申され候事に付き、秀康様へ落合主膳申したる事あり。故ありて記さず。

一、小田切所左衛門は、後才伊豆守と申し、法體して道二と申候。加州へ召出され、大坂御陣に、眞田丸へ付き、手柄之ある由、是も一代に、十三度の場數と承及び候。もとは大御所様へ仕へ奉り、長久手の御一戰に、御馬に著き候十四人の内にて候なり。

一、永井善左衛門、一代十八度の覺にて候。就中、會津・福島表にて、物見に出で、菖蒲ばえに罷在り候草伏六人起り申候を、四人討取り、甲首を鞍の四方手四所に付けて、物主の本庄繁長へ罷出で候由、永井、後は御旗本に召出され、御鎧奉行仰付けられ、法體して道存と申候と

かや。

一、本庄繁長は、上杉一門にて、若年より次郎といふ。後は越前守と申候。一代戦功、百度に餘り、上杉家にて十萬石程の大身なり。永祿十一年に、輝虎の氣に違ひ、本庄へ引籠り、謀叛せしに依つて、謙信、直に馬を出され攻められけれども、落城せずして、天正元年より六年の間、出羽の庄内迄取り、彌、大身に罷成り候。天正元年に、繁長、色々佗言致し、法體・染衣にて降參仕り候。其身、雲林齋と名を付け候を、謙信、咎められ候へば、雨順齋と改め申候。謙信逝去の後、三郎と景勝、兄弟家督を争ひ、合戦ある時、繁長一廉の忠戦致し候故、景勝より、上杉十郎憲景一跡を、繁長に宛行はれけり。十郎は三郎方にて討死す。繁長、自分として、出羽庄内の領主大寶寺義興と取合ひて、大寶寺を攻亡し、其の跡を我が二男千勝丸に與へ、大寶寺義勝と名乗らせ、景勝にも伺はず、秀吉公へ御禮致させけるに依つて、景勝、大に咎め申されしかば、繁長、越後を立ち、京都へ引込み浪人したりけり。斯くて、景勝、會津へ所替の節、赦免にて上杉家へ歸參仕り、會津の内森山の城に罷在り候。其後、福島城主に申付けられ候。此本庄越前守繁長は、十三歳の時、一族の鮎川などいひし剛敵を討平げ、武勇

智略、世に稀なる大將たり。最上義光と繁長取合ひ、出羽國千安表十五里原合戦の時、最上方の大將は、草岡虎之助・東禪寺右馬頭にて、初合戦あり。本庄繁長打勝つて、草岡虎之助を討取りけるに依つて、最上方敗軍す。東禪寺右馬頭は、首一つ提げて、越後勢へ打交り、越後黒川の者にて候、東禪寺右馬頭を討取り候間、首を大將越前守殿へ、實檢に入れ申したしと尋ぬるを、越後方の者、實と思ひ、繁長は、あれに御入り候と、教へけるに依り、右馬頭、聞くといとしく乗付け、正宗の刀にて、繁長が著たりける甲を、丁と切りしに、明珍の筋冑を切削り、脊の請筒の鐵の口金迄、切付けたりけるを、本庄、大剛の大將なりければ、ちつとも騒がず取合ひて、右馬頭を討取りけり。筋甲の四通は、透と切削り、請筒の口金・甲の鍔迄切破りたり。大きれ物故、首に刀を添へて、景勝へ進上せしを其方手柄にて討取りたればとて、本庄に返し給はる。秀吉公御代に、伏見の御城御普請の時、景勝請取り町場の奉行にて、本庄繁長在京し、勝手詰まりて、彼の正宗の刀を賣り候へば、本阿彌肝煎にて、大御所様召上げられ、本庄正宗と、異名を御附け御秘藏なり。其後、紀伊大納言頼宣卿へ進せられる由、承り及び候。上杉家にては、齋藤下野守朝信、智勇兼備候忠義の大將なり。色部修理亮長實・甘

糟備後守・柿崎和泉守、右の本庄繁長杯は、關東北國・上方にも、隠なき大將にて、謙信の左右の手にて候ひき。柿崎不義之あり、天正五年に誅戮せられ候。此本庄繁長末孫は、今に上杉家に之あり候なり。

宇佐美民部少輔の事

一、宇佐美民部少輔勝行は、越後國柏崎琵琶島城主宇佐美駿河守定行が子にて候。此駿河守定行は、上杉旗下にて、大身に御座候。祖父は、宇佐美能登守道盛とて、勇智の譽を取り、殊に美人にて、新筑波集にも、詠歌に入り申候。其子は、宇佐美越中盛久、後には孝忠と申す。公方家御直參にて、上杉旗下、則ち東山公方家蟄川親元が日記、又は東福寺萬里が詩集・梅花無盡藏にも見え申候。謙信實父長尾信濃守爲景逆心して、越後國主上杉房能を殺し、又管領上杉顯定をも討ち奉り、上條の上杉定實を壻に取り、爲景、越後を押付致し候を、宇佐美駿河守定行、廿一歳なれども、父越中守孝忠が遺言を守り、爲景に従はず、永正六年より大永元年迄、爲景と取合ひ、顯定の子上杉播磨守定憲を取立て、合戦止む事なく候を、時の管

領上杉憲方の下知にて、爲景と和睦仕り、越後一統に治まり申候。

一、天文七年四月十一日、越中國仙壇野にて、爲景討死の時、宇佐美駿河守、松倉の城に、十一日、踏止まり、越後の總敗軍を、恙なく引取り候。其手柄、北國・關東に隠なく候。其後、三條平六郎俊景・黒田和泉守・金津伊豆守逆心し、爲景の嫡子彌六郎晴景と合戦、爲景次男平藏景康の三男、左平次景房を討取り、越後大方になり候。謙信、其時は虎千代と申し、十三歳なりしを、林泉寺大寶和尚の才覺にて隠し置き、椽尾の淨安寺門密和尚へ渡し候を、本庄美作守慶秀と、宇佐美駿河守定行・大熊備前守朝秀・庄新左衛門實爲と申合せ、虎千代丸を取立て、長尾平三景虎と號し、逆心〔脱ア〕〔ルカ〕を退治す。其砌、兄の長尾晴景と景虎と、矛盾に及びしを、景虎、大義を行ひ、兄晴景を討亡せし處に、屋形上條の上杉定實、越後の國務を景虎に讓附し、景虎、遂に越後を治め申候。其刻、宇佐美駿河守定行、多勢にて景虎へ加勢し、越後の主になし候。其後、數十度の忠戦、比類なき忠功莫大なりしが、謙信姉婿長尾越前守政景は、上田の領主、隠なき勇將たりしを、少し仔細あつて、謙信直に宇佐美駿河守に密談し、永祿七年七月五日に、信州野尻城下辨財天の池靱が崎にて、政景を船にて殺し、宇佐美駿河守も、一所に生害

す。此故に、駿河守本領斷絶し、其子宇佐美民部勝行、十五歳にて浪人仕り候。されども、寺泊・柏崎・新縣より、沖野庄内迄は、其昔、駿河守定滿初は定行が旗下たりしかば、民部は此所に隠れ居り、忍んで謙信・景勝の陣の供致し、度々手柄仕り候。是は一度、上杉家へ歸參仕りたく望む故なり。

一、天正十年より新發田因幡守・同道如齋逆心仕り、十五年迄、景勝へ楯つき候。其内、天正十二年八月、景勝出馬致され、放生橋と申す所にて合戦の時、宇佐美民部乗込み、高名仕り、甲首二つ提げ、旗下へ參り、平林内藏助を頼みて、景勝へ目見を望み候へども、實父政景の仇、宇佐美駿河守が子なる故に、景勝、中々許容之なく、目見罷成らず。其後、民部は、上方にて方々と渡り、奉公仕り候。小西攝津守行長に奉公に出で、朝鮮陣の節、先手仕り、平壤合戦の時より、朝鮮加勢の兩大將の内、遊撃將軍吏儒を、宇佐美民部討取り、其首を日本へ差上げ候へば、秀吉公御直判の御感狀竝に家康公御直判の御感狀を下され、天下へ名を揚げ候由、其後、朝鮮七年の陣中、度々手柄仕り、立花左近將監宗茂とも立合ひ、一所に高名仕り、小早川隆景より感狀取り申候。其後、喧嘩仕り、大事の讐を持ち候て、日本へ立除き、越後へ引込

み、會津陣には會津へ走込み相勤め、又越後へ引込み、大坂御陣の時、秀頼公より召し候へども、大坂へ籠り申さず、其後、病死仕り候。朝鮮陣にては、黒田甲斐守内栗山備後守利安、後藤又兵衛年房、村上彦右衛門義晴、又加藤清正内森本儀太夫、飯田角兵衛杯と、同意に働き候故、黒田長政・加藤清正・小早川隆景も、宇佐美民部をば、能く存せられ候由、嫡子宇佐美藤三郎、後は兵左衛門と申候。苗字を替へ、米澤に罷在り、喧嘩致し切腹仕り候。次男宇佐美造酒助は、浪人にて大坂御陣へ罷立ち、嶋野合戦には、上杉家中松本助兵衛を頼み、上杉先手へ出で、大野修理亮治長家中武笠左助と申す者と、鎧を合せ候を、上杉家老杉原常陸介・須田大炊助見及び申候由、夏陣には、江戸御使者村瀬左馬助・中山勘解由を頼み罷立ち、五月六日、道明寺前にて高名、是は松平信濃守定真見及び申され候。七月には、稻荷町にて高名仕り、加賀衆野村左馬允・篠原織部など、宇佐美造酒助手前高名を見及び候由、其後、造酒助は、水戸中納言頼房卿へ召出され候と承及び候。先祖は、頼朝右大将家の忠臣宇佐美次郎祐茂にて、代々、將軍家の直參の名家と承及び候。代々武邊の家にて、殊に駿河守民部父子は、大剛の武士と申傳へ、今は其子孫、上杉家には絶え候。

一、色部修理亮長實、武勇の者にて、一代數十度の忠戦仕り、謙信・景勝の感状を、數多持ち申候。天文十三年、越後櫛尾陣より始めて、越後國中の大亂、所々の合戦、川中島五ヶ度の大戦、沼田陣、厩橋陣、古河城攻、小田原發向、其外の合戦、毎度の軍功莫大に御座候。永祿四年九月十日、川中島合戦にも、柿崎和泉守景家備、危く見ゆる處に、色部修理、日の丸の小旗を伏せて、横合を入れて、山縣三郎兵衛手を突崩し、柿崎を討た〔セ脱カ〕す候。謙信も、色部軍功を厚く存せられ候由、謙信も、常々咄に如何なる強敵を受け、籠城するとも、蓬氣きたなげなく軍して、勿論軍を廻すまじきは、色部修理なりと申され候。子息長門守は、會津にては、金山の城主に申付けられ候。

一、上杉家中武功の侍大将、大身・小身に多く御座候。大方は、御所様御存にて、時には使宜しき節に、御傳言杯も遊ばされ候由、總て秀吉公・御所公も、亦家中の侍も、智勇の武士には御懇なり。文祿元年春、高麗御陣の時、御旗本の御先手は、一番は景勝、二番は利家、三番は御所公なり。何れも、藝州廣島に御著、町家に御陣取り、御所公は、二階座敷に御座候處に、景勝家中潟上彌兵衛・河村兵藏・横田大學二人つれて、御宿陣の前を通り候時、二階の上より、

横田大學かと御尋ねなされ、大學見上げ候へば、御所公なり。用あつて行先急がば罷通り候へ。用なくば此上へ上り候へと、仰せられ候に付き、潟上河村をば先へ遣し、大學は二階へ上り、永井右近奏者にて、御前へ罷出で候へば、御所公は、利家・景勝、先陣を争ふ事に付き、景勝、利家を討果さんと企つる者と聞く。押す陣なれば、先後の争入らざる事なり。御所、左様に思ひ候段、早々罷歸り、直江山城守に申聞け、景勝へ異見申させ候へと、仰せらるゝに付き、大學走歸り、其段、直江に申達し、景勝も聞届けられ、殊の外、御所公思召を、忝しと申され事止むなり。斯様に、他家中の者と雖も、大學が如き勇士には、御直に御心安くなされ候に付、天下の人、望み思ふなり。

一、會津御發向前、藤田能登守取次にて、御所様より上杉家中にて御存の輩へは、御内通の御書を下され、今度は沼田を限り、奥へ御働なさるべく候間、裏切の手を合せ候へと、御意ありつるに、上杉家中の面々、御書を返し進じ申したるもあり。又有無の御返事を、申さざる輩も之あり。横田大學は、年來御所公御懇なれば、殊更此度、御懇書下されつる由、大學、つくづく存じ候は、古は、大身に罷在り候處に、秀吉公關東御打入り、其刻、本領に放れ、浪人仕

り、今僅に二千石にて、一騎合になり候へども、景勝懇にて罷在り候。唯今景勝は小勢、御所には、數萬騎にて御取懸け候に、侍たる者の主を捨て、敵方へ書通申す事、あるべき儀かと存じ、御請の書狀差上げ申さず候。景勝、小身になられ、米澤へ移らるゝ故、大學も浪人仕り、駿河へ參り候に付き、城和泉守資永取持にて、御耳に達し候へども、召抱へられず候。しかも、大坂御陣の時は、南光坊へ、大學は何方へ居候やと、御尋ねなされ候ひつる由、其時分は、出羽へ下り居申し候。御所様にも、大學をば勇士と思召され候事を、紀伊大納言頼宣卿聞召し及ばれ、其時は、常陸介殿と申奉り、未だ十三歳なれども、勇知厚き御器量にて、名ある武功の侍を、御所望の御心深く、何卒、大學を召抱へられたく思召し、板坂卜齋を以て、柳生但馬守宗矩に、内意仰入れられ、大學事を、伊達政宗へ御尋あり。但馬守、自分に尋ね候様に承候へば、政宗聞きて、此大學は、人も知りたる者なり。一萬石計りにて、堪忍致し候は、我等も望に存じ候と返答あり。奥にては、千五百二千の大將になり、度々の合戦に勝負致し、敵城をも攻め落し、我が城をも攻められ候事、數十度にて慥なる武士と、政宗物語ありしを、但馬守、卜齋に語る。卜齋、其段を常陸介頼宣も、〔脱ア〕半卜半左衛門召出され、御感斜

ならず、差物迄召寄せられ、御手に取らせられ、御覽成され候に、二本ながら吹貫に、鐵炮の玉の跡十計り宛あり。則ち兩人へ御感狀を下され候。後に寺村は六千石になり申候。栗生美濃守と名をかへ、景勝へ罷出で、其後、蒲生秀行へ歸參仕り候。

一、志賀與惣右衛門も、元は蒲生家の侍、江州の人なり。度々の覺あり。是は委しき事承らず候。其子息は、本多内記殿に罷在り候。働の委細は、存せず候。

一、川中島合戦五度といふは、天文廿二年霜月廿八日、川中島下米宮にて合戦、是始めての合戦なり。天文廿三年八月十八日に、川中島にて一日の中、十八度の合戦、十一度は謙信の勝利、六度は信玄の勝利なり。犀川を信玄旗本にて、綱越にして、萱野へからまり、越後勢の後へ廻し、謙信旗下を突崩し、謙信敗北の處を、渡邊越中守、翔手かけるてにて横合を入れ候。宇佐美駿河守定行も、三千の備にて、大塚村に立ち候。斯様に鎧を入れ、信玄旗本を、御幣川へ追込め候時、川中にて、互に馬上にて渡り合ひ、謙信と信玄と太刀打なり。されども、川水深く勝負なし。此日、武田典厩信繁をば、謙信直に討取申され候。敵味方共に、七千餘討死之あり候。三度目は、弘治二年三月廿五日脱夜より、明るる廿六日迄の合戦、是は勝負なく持

合戦なり。四度目は、弘治三年八月廿六日、上野原にて合戦、始は信玄勝ち、後は謙信勝なり。五度目は、永祿四年九月十日、原の町にて、合戦、但し大合戦なり。信玄敗軍にて、土口といふ山へ懸り敗北、謙信大勝利にて、原の町にて休み、兵糧つかひ申され候處へ、武田太郎義信、八百餘にて旗腰差を隠し、物蔭より不意に、謙信旗本を駈亂し、散々に戦ひ、謙信も自身重代の五挺の鎧の中、鏑鎧にて働き、後は彼のひふの長刀にて、防ぎ戦ひ終には武田太郎を追崩す。此合戦共に五度なり。委しき事は、五戦記にあり。

甲陽軍鑑には、謙信旗本にて脇へ廻り、信玄旗本を突崩すとあり。左様にて犀川を綱越にし、萱野へからまり、不意に謙信旗本を突崩したるなり。信玄も太刀、謙信も太刀にて、御幣川の中にての戦なり。信玄、軍配團扇にて、受けられたりとの事、越後にては沙汰なし。五箇度の川中島合戦に、上杉家中上下、謙信より直判の感狀取りたるに、年號月日詳なり。五箇度の戦は、五戦記に詳なり。故に之を略す。

一、永祿四年九月十日の川中島合戦の時は、善光寺に、謙信一日逗留なり。高梨山へ懸り除くといふは偽なり。和田喜兵衛を手討は、永祿三年五月、上州高崎城下、鳥川といふ所にて

の事なり。

一、信玄、五箇度の川中島合戦に、毎度勝れたる勳あり。甲陽軍鑑には、之を記さず。誠に惜しき事なり。

一、上杉景勝の實父長尾越前守政景は、越後の國上田城主、武勇智謀勝れたる名將なり。若し別心などあつて、武田信玄と一味あれば、大事なりと、謙信、心許なく思ひ給ひ、政景を殺さんの志あれども、上田家中、多勢にて起らん事を思慮し、其頃、信州野尻の城主宇佐美駿河守定満を呼び、謙信密に相談あり。駿河守諫めけるは、政景は、家の總領筋にて姉婿なり。見えたる悪事もなきに、誅せらるゝ事不義なり。其上、政景を亡したりとも、上田一統に起りて、國中大亂となるべし。思ひ止り給へと言へども、謙信承引なし。駿河守思案して、左候はば、政景をば討果すべし。跡の上田も、起らざる分別仕り候。我等に任せ給へとて、野尻の城へ歸り、城下に辨財天の池とて、二里餘の湖あり。いつも六七月には、船にて鯉鮒を取る。定満、船の底に穴を掘り、其れにのみを差置き、政景の川狩かとりに託け、たばかり寄せ、彼の船に、駿河守も乗つて、政景と同船し、靱が崎より漕ぎ出し、湖水の深き所にて、のみを抜いて、

船頭共は皆遊ぎ逃ぐ。水涌き入り船沈んで、政景も定満も、共に生害、政景三十九歳、駿河守七十六歳なり。野尻城下も、上田城下も騒動斜ならず。謙信も斯様の事とは、思はざる故に、驚いて駿河守定満が遺言状を見給ふに、其文に曰く、政景を亡し給ひては、謙信末代迄の悪名なり。斯様に政景を殺し候へば、上田も起らず、無事に濟み申候に付き、斯くの如くに仕り候。此上は、駿河守定満逆心か、又遺恨故に政景を殺すか、何れ不届を仰せられ候ひて、宇佐美本領を御取上げ、跡目御潰し、一子民部少輔勝行をば、御暇下され、追放なさるべく候。定満跡目御立て候は、上田衆、意趣残り、始終亂の基になるべく候。謙信の御爲め、國の亂れざる爲めに、我等跡目を御潰しなされ、罪科をば皆我等に御被せ候へ。是亂を鎮むる仕方にて候と、書遣き候を、謙信見給ひ、駿河守は古今稀なる忠義、彼の身を殺して、以て仁を成すとは、之なりと落涙數行なり。されども、駿河守が子民部勝行は、所領沒收して、浪人となるなり。謙信を十三歳より守り立て、越後の主とし、今又國の爲めに死せし事、忠義世に稀なる事なり。

一、新發田因幡守治長は、信長の内通にて、天正十年の春より、景勝へ敵對せしが、思の外、

其年に信長公亡び給ひ、新發田力を失ひ候を、景勝出馬して、歸られ候へども落城せず。天正十五年迄持こたへる。景勝は、奥州堺赤谷の城小田切三河守が、會津盛隆へ一味し、兵糧を運送する迄察して、景勝直に赤谷の城へ押寄せ攻め落し、小田切が首を取り、其地より新發田城へ寄せ給ふ。其道二筋あり。近道には、三淵といふ大切所、一騎打の所にて、道より下は、千丈計りの崖にて、下は大海の淵なり。遠路は平地なり。皆近道を押寄せ給へと勸むるに、景勝の曰く、兵法に迂を以て直とし、患を以て利とすと見えたり。大將は近きとて危き道は行かざる者なりとて用ゐず。新發田が兵に、波多野忠右衛門秀綱といふ大剛の兵あり。六年此城持こたへたるは、赤谷城より兵糧弓・鐵炮を、會津より運び續けたる故なり。赤谷落城の上は、新發田も落城なり。三淵の上なる一騎打は、道端の岩穴にかくれ居て、景勝の通り給ふ所を岩陰より飛出で、待懸けけれども、景勝智將にて、遠き本道へ廻り給へば、波多野が謀も叶はず、新發田因幡守一類、悉く滅びけり。景勝の智勇を、世以て美談せしとなり。

近世軍記 下 大尾

大正六年四月十三日印刷
大正六年四月十五日發行

【越後史集 八】
【定價金壹圓五拾錢】



編者 黒川眞道
發行者 國史研究會
右代表者 今村勝一
印刷者 榎山定吉
印刷所 友文社

牛込區市ヶ谷柳町二九番地
神田區三崎町三丁目一番地
神田區三崎町三丁目一番地

發行所 東京市牛込區市ヶ谷柳町二十九番地
振替貯金口座東京二七〇二四番
國史研究會

IT 8M15



